

Pensoj flugas trans la land-linon

The Senryu Zasshi

No.318

麻生路郎☆主筆



十一月號

川

柳

の雅

証

本社十一月句會

時十一月七日(土)午後六時 處大阪市天王寺区下寺町二丁目 於 光明寺
題「ベシ」路郎選「新聞」香林選「公務員」選菜 柳話 路郎 評句 古方

十一月号目次

(昭和二十八年)

題 字……………麻生 路郎	表 紙……………米田三男之介
かほそき文化国家……………麻生 路郎(三)	どういふ傾向の句が好きか……………葭乃・鮎美・古方(四)
川柳の歴史……………福田山雨楼編(二六)	川柳ベニシリン……………北川 春巢(二四)
岡田三面子と私……………八木摩太郎(七)	新川柳鑑賞……………麻生 路郎(三三)
永遠の友二山……………安川久留美(二六)	性と云う名で……………品川 陣居(二四)
川柳を作れ……………藤本 茶々(一八)	観音まいり……………東野 大八(二三)
人間横丁(Ⅶ)……………北川 春巢(二六)	BK川柳の放送をして……………北川 春巢(二六)

没食子と私……………水谷 竹莊(二六)	平清盛(二)……………富士野鞍馬(二六)
BK放送川柳……………北川春巢選(二二)	★
近作柳欄……………麻生路郎選(二六)	川柳 塔……………麻生路郎選(一八)
同舟近詠……………諸 家(二五)	一路集「親類」……………水谷 鮎美選(二七)
「失敗」……………菊沢小松園選(二七)	各地柳壇……………(三〇)
不朽洞会から……………(三三)	柳界展望……………(三四)
編輯局にて……………(三五)	

もつと速く もつと便利に…

名古屋ー大阪 特急 2時間55分

名古屋発 8:00 11:00 14:00 16:00
大阪発 9:00 12:00 15:00 17:00
青森急行はこのほか60分ごと運轉

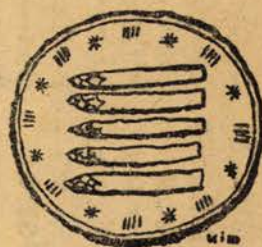
近畿日本鉄道

OSK

毛織物 既製服 製造卸商

株式会社 大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目二
電話東 一七四五番



かほそき文化 國家

——政治屋さん
に与う——

文化國家も熊がノコノコ山から出て来るようでは本島の北海道化であつて、マコトに心細い。北海道でも、もう熊の姿をザラに見かける訳ではないのに、コレは又何としたことであらう。政治の貧弱だと熊にぞめかれそうである。多額の経費を使つて、アチラの

見学よりも、熊にエサでもやりなさいと云いたい。食糧問題は国民だけの問題ではないと思う。熊も口を開けて待つてゐることを考えるべしである。

文化國家の榮養不良ほど見つともないものはない。カラ威張りの見栄坊でしかないからである。

岡山県の遠二と云う作家が

おいらへは人遣麥が出来るだらう

と云う句を作つてゐる。悲痛なレジスタンスでもあり、大きな皮肉でもある。政治屋さんは大いカナテコッソボだから、こんな句は耳に這入らないだらう。なさない話である。

(路郎)



どういう傾向の句が好きか

麻生 霞 乃
水 谷 鮎 美
戸 田 古 方

を誘う句です。

我も其鳥合の一人賛成す

(翠光)

前の句に比べますと同じ心理描写の句でも此句は余程強氣の句ですが内心の不満は十二分に感じられる句です。又沐天さんの句で

惱みに答ふ答へてくれて
亦惱み

扱て、受けた答は自分の心に割り切れぬものがあつて、更に惱みを倍加する。英断に乏しい女性心理、惱めるものの心理をうまく表現していると思う。最近の句にも好きなのはいくらもありますが、今覚えていませのでこれ位にして置きます。

病人も頭を上げて禮を云い (満潮)

こういうのがありますが、此の句には修辭的な字句は少しも見当りません。日常語で日常あり勝ちなことを詠んでいる様に見えますが、起き上つて礼が云えない程ですからきつと重患でしょう。それでも頭を上げて礼を云う処をみれば、或は経済的にも多少の援助を受けたことのある見舞客とも受けとれますので、病人の心の動きも掬みとれて哀れ

と云つても内容が好きであつたり、調子が好きであつたりするので沢山ありますが、これを総括して云えば句に作者の一貫した思想が流れている句、或は人間の心理を掴んだ様な句が好きです。作者の思想が流れていると思われる句としては

木の葉の青さ團結せよと

いふ (緑之助)

こんな句が好きです。此の句は繁茂した枝にモリモリと盛上る緑の深さを取り上げて、作者は團結の力は強いものであるという自分の思想を表現したものです。

人と鰯鰯は油したたれり

(平八)

六尺の脊文を誇つている大男も、油ぎつた点では僅か二三

梨里川お忙しい処をどうも……早速ですが始めて頂きましようか。秋も深くなりましたが、秋の夜長の放談と云う様な氣持で何でも結構ですから話して頂きたいと思ひます。と云つても何から話したらよいかと云うことになりそうですが……そうですね、皆それぞれに個性の違ふ然も古い經歷を持つておられる方ですから、どう云う傾向の句がお好きかと云う様なことを聞かして頂くのも興味あることではなからうかと思ひます。先づ鮎美さんからお願いしましう。

鮎美……いやあー奥さんからどうぞ。

霞乃……レディファーストですか(笑)そうですね。好きな句

を画いたとします。若しこのどつばの絵が指で触れるのも汚ならしいと思う程に画けたとしたら、眞実を描いたと云うことの姿に一つの美を感じるのでありますから、社会をありのまゝに写すと云うことも大切だと思ふのです。

古方君の姿の眞相と云うのはつめてみれば（掘り下げてみれば）慾望以外の何物でもありません。世界史の法則を見つかることが今日社会科歴史の眼目ですが、その中ではつきりと云える一つの法則は今云つた人間が慾望を持つてゐると云うことです。この法則でならば数千年この方の歴史現象が説明されます。今葭乃先生がどつばの画のお話を取り上げられましたが、おそらく画の題材としてこれ位醜いものはないでしょう。そこに美を感じると云うことは大きな意味を持つてゐるのであります。万物すべて佛性ありと云う、その佛性とは何であるかと云えば、外ならぬ慾望を万物が持つてゐる、慾望あればこそ、救いがある。このどつばが美化された姿と云うのはどつばが成佛した姿を現わしていると考えられるのです。それは先程私が申し

ました逆縁の一つの姿ではなからうかと思ひます。

鮎美君順縁と逆縁と云うことを古方さんが云われています。それは以前から私が云つてゐる醜は美に通じ美は醜に通ずると云つた事になるのです。私も古方さん、奥さんに語らずして今思うと通じてゐると思ふのは川柳は宗教であること云うことです。が皆それ／＼の考えがあり、そこに色々な作家が現れて精進の結果、我々に見られない佳句を月々に詠つていられるのです。それぞれの想ひはありますが、柳俳を分たず落つれば同じ谷川の水となるのでしよう。だから自分を信じてと云うことを先ず第一に確信してこれからの道を確歩すればそれ／＼の柳塊が創れるのです。浮世さまさまの暮しですが、人世はやはり良き子、良き父、良き夫でなくてははいけませんね。

古方君良き子、良き父、良き夫は如何にして得られるか、私が川柳を作るから川柳によつて得られると云えば、云い過ぎかも知れませんが、若し川柳の世界を知らないならば自暴自棄になり兼ねない自分の本心を振り返つて見たと

き、十年、二十年の川柳生活を通して計り知れない恩寵を蒙つてゐることをひたすら有難く思います。少なくともまあそう云う心算で句を作つていたからかも知れませんが、他人はいざ知らず私の句を分類するならば、総て私の心の奥底に潜んでゐる醜い慾望の何等かの表現でないものは一句もないと云えましよう。すなわち路郎先生の云われる社会批判、人生批判は人間の本性である処の慾を色々様々な形で表してゐるのであります。て句を作ると云う行爲の前後を通じて、その醜い慾望に対する反省と自覚が促がされて来るのです。高僧のお説教もさることながら、私には作句そのものを通して毎日毎日救われてゐると云う喜びを感じずにはいられません。

葭乃君川柳を宗教として生甲斐を感じてゐられる古方さんも、すべてを美化して蕩然としてゐられる鮎美さんも幸福なお方だと思ひます。私は毎月皆様の句を拜見して幸福を感じてゐるのです。それで又好きな句の事について述べますが、内容はさほど川柳的なカラーを帯びていなくても調子で好きになる句もあるもの

麻生路郎著

水武書房版

川柳を研究したい人々に好適の書

々々々々々

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書として唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢えて一説を薦む。

B 六版 (二二頁) 改正定價一三〇円 送費 十六円

取次御注文は

大阪市住吉区南瓦町五丁目二五
無錫口座大政七五〇五〇

川柳雜誌社

です。

一と七日二た七日とて

秋の花 (靈子)

月あれど山あれどいま

君は亡し (善弘)

一步一步一万二千尺

花鉄花の生命のそれ (六文銭)

や (草木)

これらはどれも一ト区切り毎に頭韻を踏んでゐるか、或は音律の配列によつて耳に心よく響いて来るのです。私は音律の美は短詩型文藝の中核神経だと思つてゐます。字数は十九音字でも二十音字を突破していても此の音律の配列が

よければリズムカルな調子になります。

古方君今葭乃先生から調子の句のお話が出ましたが、川柳が詩である以上こう云うふうな形式上の優れた句の中に好きな句があると云うこともまた当然でしょう。私が以前にやたら、シナリオなどを考えておつた時代に、モンタージユと云うことがありますが、只單に耳から来るころよいリズムもありますが私の云いたのは内容的リズムです。これには比較、対照などの句があります。これらは既に沢山路郎先生の「川柳講座」或は

「続川柳講座」に引用されていますが私はこうした句の中で好きな句といえは豆秋さんの

洋館に先祖の槍の置きどころ

ラッシユアワの群集と牧場に追いまれる羊のむれ、これは比較でしょう。又この句の様に洋館と槍という様な全然ちがつたものをもつてきて、しかもそのならべ方の如何によつてそこに内容的リズムを私は感じるのです。

鮎美「今リズムの句が述べられましたが、私にもチェックしている句があります。

ハッピーエンド眞白き紙に何を書こ

(アート) 淋しき美あれが火になる

(アキラ) 目を想ふ

吹きぬける青田の風と

やきなすび (一糸)

その他にもまだありありますが、第一句は既に上五の「ハッピーエンド」と云うことが私の好きな想、中七、下五にも極端でない青年の純情が遺憾なく溢れ出ていて詠んだ後、想うた後のすがすがしさが心よく感じられる。リズムに於て万点、第二の「淋しき美」は下五の「目を想う」に到達するまでの練想は若人を

飛び越えていて佳い。第三の「吹きぬける」は田園詩を斯くまでに詩性豊かに詠まれたことは私の生活にピッタリ来ていて領ける。(句主は川維岡山支部の柳人で、この外に川維岡山支部には過去一年間にでも多くの佳句がある) 以上述べたのはほんの一部に過ぎないが、将来性のあるそれらの風格を上げたのである。

古方「かねて路郎先生から伺つてゐるのに、リズムとか、音字の数は作家の息の長短によると云うことです。従つて私どもの身近かなお心易い作家の中にも何時も十七音以上の句を好まれる方もあれば十七音に満たない作品を多く発表されている方もおありになる様です。同一作者におきまして、ある時は長く、ある時は短くなる場合もあるうと思ひます。だがその作家は絶えず十七音を中心としておられることに変わりはないのです。私も最近では十七音の正調よりも、むしろ十七音を意識しない破調の句が出来ることが多いのです。だがそれはそれでいゝんちやありませんか。

茂乃「ですから句の調子と云うものは着想と同時に生まれるべきものであつて、たまたまりズミカルな文句が見つかったからと云つて、それを使つために内容を考えるのは一番まずい作句態度です。そう云う句は大抵の場合調子と内容がマッチしていません。そのくせ作句時間は二倍も三倍も要して苦勞仕甲斐のない結果となるものです。

鮎美「手紙を書く様にすらうらと句が生まれる場合もあり一句纏めるのに四、五日もかゝつてようやく作る場合もありますが、それは総てその時の環境にもより、健康状態にもよると思ひます。苦勞をして出来た句が必ずしも良い句であるとは云えませんが、矢張り掘り下げて研究する精神を何時も持つていなければなりません。荊棘の道を踏んで來ての幸福こそ、眞の幸福であり、棚ぼた式の幸福は本当の幸福を知らない幸福である。私は思つていますが、作句の上でもそう云うことが云えると思ひます。これからもこう云う心がまえで作句に精進して行きたいと思つています。

梨里「色々有意義なお話を伺つて、作句上、大変参考になることゝ思います。あまりお

そくなつてもいいかもしれませんから、これ位で幕を閉じること致します。どうも有難うございました。(梨里筆記)

岡田三面子

と私

八木摩太郎

私が早稲田に在学中の頃、岡田三面子が居られた。刑法の大家、岡田朝太郎博士で、支那の刑法の編纂顧問であつたと支那の話をされたが、古川柳の研究家であるとも勿論知らなかつたし、川柳の話も出なかつた。よく明治で、川柳の話をされた様だが早稲田では聞かなかつた。明治も早稲田も教授であつて講師では無かつた。小柄の男らしい導とした顔の博士の講義は今にも、耳に残る思ひがする。

私として忘れることの出来ないのは刑法の試験に、同博士が來られて、黒板に

帝國と書いて

一字空けての

我刑法の効力

如何と書かれた。そして支那語を少し発音された、勿論今でも判らないが多分支那語で書いたらしいかといふが、直ぐ黒板に向つて、帝

國の其の空いた所へ外の字を入れた。帝國外に於ける我刑法の効力如何。これが一間でしかも二時間ブツ通しの試験で、しかも一年一度の進級試験だ。我國内に於ける刑法の効力なら何とか書けるが帝國外と來たので、皆ボカンとした顔であつた。半時間、一時間とは過ぎる。まゝ、何とか書こう、白紙の答案よりましだと思つた。先生には句讀を集める氣であつたか、それは知らないが、しかし、進級出來た事は矢張川柳のやさし、を知つた博士の温情からかも知れない。四疊半、月二十五円五十銭の下宿代の学生の事も考えられて……

多くの教授達の中に、今でも親しみのもてる同博士は、今や亡し、たゞ僕の書齋にある。天が見えそう富士の初かすみ (三面子) の短冊と時々見るアルバムに同博士を追想して、あの頃を、なつかしき、時々早稲田の二十番教室を偲ぶのである。

大阪名集

もやか民のや
漢氏もや

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九

民かまど本舗

電話 三三〇九



兵庫県 戸倉 普天

どこへ行き度いとも思ひません妻は老け
駅の賣子百円札を驚づかみ

札束をさもぞんざいに闇屋出し
スクーター農協が買ひ医者が買ひ

平塚市 木村 孤浪

アベックはたび／＼人にぶつつかり

改札は巡査の拳手を軽くうけ

求人欄妻の眼を避け横目で見

ウインドのラーメン喰ひ切れそうもなし

タイムズルアクセサリーの役に立ち

流行はボタン前にし後ろにし

あつさりどほんごうを言う娘に育ち

クリームの知識豊富で未だ嫁かず

氣の抜けた顔を並べた月曜日

池田市 戸田 古方

漢字の魅力私は明治の生れです

だまつてもおれすしんだともいえず

ねころんだら敷きにくるねころんだら敷き

にくる

尼崎市 水谷 鮎美

快諾のグラス螢光燈もよし

大阪市 市場 沒食子

口説くなどまだるい事が出来ぬ歳

俺がと云ふがが前には多過ぎる

秋だなと氣づけば明日は地藏盆

横浜市 福田 山雨楼

映画館殺し孝行だつたとは

層屋にも同情される不倖

横綱三十場所の羽黒山引退

その昔風呂番もした羽黒閑

永ノル市 内藤 草一郎

旅勝ちのハズで二号と間違われ

羨むな男振りより使いぶり

上席へ片付けられて飲みそびれ

前身が後姿に失せきれず

酔ふて居るうちが俺とは哀れなり

後添ひはちよいとお相手樂に出来

手離しであくびする程おんな馴れ

唄一つ出さず割勘拂わされ

米子市 三鴨 美笑

肺病もやんでみたいも十八九

仲直り女は意地をまだ捨てず

布施市 吉田 水車

職安所一應同情してくれる

映画戦艦「大和」

科学戦たゞ目標となるばかり

うどんやの隅でさ／＼やく恋なりし

いなづまのネオン如きと言ふ光り

葉書かて此頃馬鹿になりまへん

朝顔の所かまわずしがみつ

やけくそのような風呂屋の扇風機

大雨警報橋が流れてしもてから

暑いのにわざ／＼火事を見に走り

訴訟することが趣味とはさみしいネ

大阪市 正本 水客

晩酌の淋しき月に見て貰い

奥様の地声を犬も心得て

駄目な人間になつてしまひそうに坐る

雨の電車の窓を頑固に開けて置き

ばら／＼の高級品で身を飾り

生字引金にならない用ばかり

ターミナルの生花に腹の立つ日なり

大阪市 丸尾 潮花

コスモスの花へ夜遊びギョツとする

腹這いのま／＼で捕物帳を読み

看護婦が博士のような口もきく

貞操を捨てたらこわいものがない

白髪さえ染めない母になつてゐた

妻の瞳の涙は愛を求めて居

後家たてゝゐることは世間だけのこ

大阪市 北川 春巢

診断書外で女が待つてゐる

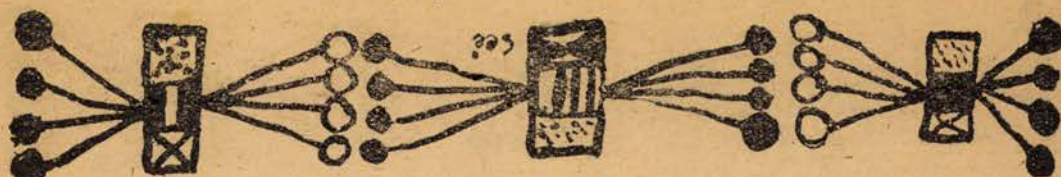
洋室に直せば違ふ風が来る

風呂好きが兒を風呂好きにしてしま

父と来た夜店なんにも欲しがらず

煙草買ひに出た子婦らぬ大掃除

水虫に困る話の女事務



奈良県 尾崎 方正

足の裏ノソックスもよいけれど
むつかしい顔をしてるが子を拵へ
眞黒な手で借りられる眞の火

岡山県 浜田 久米雄

悪友をすげなく帰すくすり瓶
酒やめてきて人生はどこにある
國鉄を信じて他愛なく眠り

金のないしょうこは爪がよくとがり
庭園が果樹園なる暮し向き

大阪市 菊沢 小松園

何時の日の俺に御光のさすことか
父として四角に坐る癖がつき

黙つてゝ何んでも知つてる父にして
雨もりのだんゝ派手に落ちて来る

責任の軽い地位なりよく喋り
満ち足りたこゝろ女に見透かされ

岡山市 大森 風來子

片山津温泉

雨の國宿の浴衣の生乾き
溪流の薄い陽へ干す長繻絆

サービスの胃散も女將持つており
増築は女將の腕ごうわさされ

大阪市 水谷 竹莊

チップ出るまでべんちやらのつゞけられ
眞実の恋に貧乏苦にならず

有馬温泉にて

炭酸水飲みに出かける貸ゆかた

下関市 弘津 柳慶

白靴で出社をすれば雨になり

図画だけは誰に似たのか上手なり
アスファルト今年の暑さも峠越し

下関市 國弘 半休門

検札の目に付くものに秋扇
停止する事を忘れた交通禍

兵庫県 小西 無鬼

喰べかねていながら二匹も犬を飼い
あの人も金儲けてる禿げている

掃除する特権ソファーにも憩い

京都市 大鶴 喜由

さわさりながらばばは左程にふけていす
ビールの泡を前に夏はよし君と僕

出来たと知つて母も嫌いを引込ませ
大物ぢやないねコセゝし過ぎるよ

麻雀に凝る程仕事凝りもせず

大阪市 山口 秋花

油断して居ればトラツク子を殺し
どうかなるこんな氣持が家出さす

計を待つていたよな名士を偲ぶ記事
犬を添え持家貸して御榮轉

吹田市 野本 吞水

始發駅米兵女に立たされる
配給米だけで足らぬによく太り

一應は螢の光でケリがつき

大阪市 富岡 淡舟

測量の技師は涼しいところで佇ち

事故のない夜は耳などはちくろう
腕章の手前後へは引けぬらし

己を知つて怒りを押える

お父さんの様になるとはいぢらしい

奈良県 飯降 白香

昇給は教師の人格など無視し
危篤やゝというて未だ生きている

情熱なんど唯ねむたいばかりです

奈良県 西辻 竹青

私にも乙女の昔あつたのよ
すねた夜の別れゝに喰ふ刺身

山口県 長野 井蛙

失業の耳を共產党へ貸し
蚊帳の色あせて倦怠期が続き

若鮎などとはやされたのも二昔

大阪市 松江 梅里

内祝また石鹼かさあげもせず
派手すぎても貞操も疑われ

肉体を褒めて顔には触れて来す
太腿の白さを盗む男の眼

靴磨きの目を見張らせてる脚線美
未亡人娘の結婚へ少し妬け

宿直と言ふ事にして二号と寝
月の出へ恋の二人は立ちつくし

照りつける太陽に似た彼の愛
一号の葬儀へ二号のつゝましく

基地の娘の之より好きな色の道



家柄が斯う迄恋路の邪魔になり
二号とは言わずお世話になつてます
螢火のように冷たき女なり

岡山県 黒田 笑泉

帰るまで氣になる夫のスクーター
謹嚴な顔も見て居るストリツプ

大阪市 西森 花村

キューピーのお腹を秋風撫でて去き
人生の終点淋しい駅でした
燈明に似て一筋に燃えし君

鳥取市 河村 日満

鉄洲老逝く

米を磨ぐ音絶ゆる世に未練なく
不孝者ばかり残業して降られ
恨まれていたことを知る酒の席
御焼香大きな息子さんがあり
口紅の唇は人形のやうなれど
引きとめもせず惜別の辞を捧げ

兵庫県 家沢 齊花

お負けする様に遠雷又一つ
盗みする悲しい夢を見てしまひ

年寄りの日を新聞は書きたてる
長命寺耳に響の良い名前

切抜きの缺名士の顔も切り
保安隊さすがパン／＼連れていす

月見草アブレはかえり見て呉れず
金策の急がば廻れ碁に坐り

喰えかけたらしく何んにも言ふて來す

滋賀県 黄瀬 美秋

極道を直すお嫁にもらはれて
編棒の止りがなちる悲恋の娘
人の好い娘のお勤めが氣にかゝり
横着な方の鶏からつぶされる

教科書の習つたところから破れて來
敷医者氣樂なところでやつともち

東京都 藤本 満年

一時の球もわが意に添わす飛び
大官の招かれ上手な座が弾み
家庭藥敷医者程の妻の腕

散髪にゆく程今日は閑があり

岡山県 福島 鉄兒

別居して布團重たいものと知り
石松の様な男と添いたい妓

東京都 藤本 茶々

傳書鳩のように夫は帰つてき
修身を習つた大人の仕業とは

かんしやくの腰を折られた返事され

十代はあつさり殺してクロリとし
意見する心のこんなにも淋し

大阪市 塩浜 一路

大声も静まつて來た西瓜切り
蜘蛛の巣もきれいに見える婚約期

関東煮のコロもうれしく一杯目
貧村にしてはまどな橋かゝり

愛称の電話東京からかゝり
全盛が一代きりの藤の棚

岡山県 横部 牛歩

田満は敷かれた振りの二十年
佛のと同んなじ菓子をするめられ
むつつりとした親切を女好き
漫才の様な返事で愛し合い

恩人を出し抜く仕儀は苦しかり
産制に用のないのを笑い合い

岡山市 服部 十九平

夕焼がこんなに綺麗な水害地
斗病の焦りが医者を変ええる

金のかす奴から順に死んで行き
白麻の脊廣今年も着すにすみ

おじいちゃん云はれどうないバナマ帽

職安の帰り血を賣る話し聞く
石鹼の好みも違ふ姉妹

兵庫県 若林 草右

蟬取りへ通りすがりが肩をかし
入道雲ボート一つが沖に在り

かき氷我が日本の味を持ち
夏休み親はさつぱり休まれず

お祭の太鼓へ遠く會つてゐる
奥の座のメロンへ秋の風が吹き

熊本県 有働 芳仙

窓際のいちじく今日も一つ減り
女ふと花の生涯見て淋し

初孫のミルクの匂ひまで愛し
二代目は乳母の眞心知つてゐる

高知県 大西 迷窓



チンドン屋寢巻の柄で踊つて來

下関市 阪田良坊

噛みしめて妻の個性を三十年

蛾のやうに場末の夜の街に生き

下関市 石川侃流洞

突出しは女給の好きなものばかり

蚊帳へ来てスィッチョ旅情をなぐさめる

腕白でよしうを云わぬ子に育て

広島県 山田季賛

ガム噛んで初恋の頃思ひ出し

約束を破らす様な雨が降り

元將校企画課員の椅子に据え

昇給も其の他大勢の列に居る

年四〇タイプ何時迄打つつもり

チンヂヤラン四時ともなれば耳につき

井狩のバス降りる頃雨になり

岡山県 水田千石

追いつける程に母親逃げてやり

子のかける英語講座へ母も坐し

基地と云う名が縁談を又こわし

浪曲がすめば親父はねてしまい

叱つた子が俺にもたれてねてくれた

大阪市 山本葉光

生きてゐる不思議医学の粹の外

甲斐性ある男借金だらけなり

儲かりもせぬ嘘甲斐性なしが吐き

大阪市 東喜久堂

新装でおなじ所に案山子立ち

妻の留守只一日で身に應え

大阪市 鈴木天貧

体裁はよいがニコヨン並な僕

くよくすなご月が綺麗に澄んでいる

倉敷市 木村千容

筋金の入つた税吏で隙があり

只で行く映画暑いなごもいえず

神職が柄にない上手いうて去に

味加減辛抱したご誤解され

文化市というも恥し泥いされ

夢らしきゆめなく古稀に手がごまき

石川県 那谷光郎

母の愚痴ニキビまさぐら聞く息子

よい年をしてご短氣を妻押へ

御見舞に來た肥つちよが頓死する

里からの客へ妻だけ忙しく

慣れつこの悲鳴に近所驚かず

大阪市 木村水堂

悟れない夫婦お金のことで採め

何事ぞ女一人を持てあまし

映画祇園囃子

人知れぬ涙だらりの帯に秘め

今晚も涙をかくす厚化粧

堺市 八木摩天郎

紙に似しうすき世情はほろにがし

下の方へ判を押すのも平社員

一足の違い税務署入つて來

倉敷市 水谷谷水

人肉市場歩きや空巢の心地して

貰つたらにや今頃お前修道尼

たかびしやにでたらなるほど妻歎り

成績のいつぞりなら苦にせぬに

泳ぐでもなく裸女群に見えれど

イエスともノーとも云わす口説かせて

うすくは母の職業知つたらし

完膚なきまでなきおろしすつとした

足の蚊に足踏みしいしい立話

母からの荷造り念に念を入れ

一人だけはお医者者に仕立てる親の肚

岡山県 岡田夜潮

素早くも填輪のそばに露店出來

ヒロポンを手に入れるのが日課なり

同権の味も知らずに妻は老い

中年になつてますます厚化粧

岡山県 坂井三葉

内縁の妻がご二号負けていす

うなづいただけで内氣の見合済み

故郷の柿が恋しい空になり

医者一人かゝつた夜の非常線

我慢した顔ばかりなり満員車

岡山県 政田大介

音痴だと云えす参だけ貰つとき

落籍されてからは障子を立つてあけ

民主主義内氣な姉が嫁きほぐれ

二号持つてからの邪見と知らぬ妻

大阪府 青柳扇子仙



消火器はさみしからずやひごうぼち
ジャズよりも茶漬の味がよろしおま

岡山県 岡村牛耕

晝間見た白衣がバーをのし歩き

校長が本氣になつて座が白け

ベンだこが履歴書よりも物を云い

校長の教育論をおだてとき

大阪市 稻葉鳩花

油手を見られて課長とは云へす

燃えるやうくるふがやうにジャズが鳴り

酒だけは娘にそむく父になり

茨木市 下山清湖

水害録音晩酌一寸ひかえさせ

行水もビールの音へ早くなり

俺よりも苦勞したろう父の顔

岡山県 本田恵二朗

派手なことないよと妻へ世辞を言ひ

絹すれの音青壘なればこそ

生返事して電話口あやしまれ

大阪市 眞鍋一瓢

なめくちの反省過去は無駄ばかり

霧の夜の街の娼婦に道を聞き

脱毛脱毛覆水盆にかえらざる

口説くんちやないぜとねばるのも趣味か

事足らぬ仲へすまなく呑んで来た

霧白く裸婦の乳房を濡らしに來

拂うて拂うて御幣疲れたり

正直に妻は一合買ふて來た

古うても使える妻が居て呉れる

堂守は時雨をはめるゆごりなく

京都市 松川杜的

凡々と生きて秋の虫秋の月

紙屑屋眞つさらの十円札を呉れ

お月見の帰りのつばりパチンコ屋

大阪市 永田六龍子

戦犯え軍艦マーチ何と聞く

住宅難ゴルフ場出来るうわさ聞く

失業え何處からともなくジャズ流れ

市場籠テレビ見てゐて飯がこげ

鳥取市 森本法泉子

真教寺鉄洲氏の告別式にて

本堂が出来ぬに佛やつて來て

吉田首相

節操をMSAがすてさせる

鳥取県 日置文郷

郵便と言ふ声で來ぬ療養所

草花の趣味も闘病以來なり

あいびきの電話中々出てくれず

大阪市 佐野牛歩

八月三十日宿題三人持つて來る

買い取られた土地で最後の花を咲き

センセイシヨン只四インチ短なる

疑がどけて女はよくしやべり

顔見たら言ひたい事も言へなんだ

大阪市 後藤梅志

橋下の氣輕き猫も犬も飼ひ

乱能を見るのは女弟子ばかり

精勤な車掌西日の窓を閉め

大阪府 小池しげお

女学校の教頭白髪染してる

兄弟が揃うて父に逆らへり

五百円硬貨にすればちこ重し

借金を返した後の青空よ

兵庫縣 竹内圭三

インタンもう看護婦といふうわさ

嫁もろてからの老母のなむあみだ

血色のいゝのがうなぎ食べてゆき

日歸えりへ宝物館は素通りし

大阪市 山崎帆加夫

兎行にうるんだような夜霧の灯

子の写生機関車停つて欲しいなり

アルバイト同志の恋愛至上論

信心と別に氏子の役につき

倉敷市 松村万古

親切が身にしまぬとは哀れなり

松葉杖までパチンコの群に入り

倉敷市 藤井春日

榮養士蒲柳の質で氣がひける

スクーター西や東と手形の日

口説かれて女自信を取り戻し

大阪市 木口賀峰

凸凹の道とは知らずハイヒール

妾宅に牛乳瓶が二本あり

弱点を知つてゐる娘を好きになり

伯母の智恵それから女房寝白粉

いゝをする鏡の顔は紅を刷く

くねくねと汽車で着かえるいゝ年増

岡山市 津田麦太楼



人間横丁 (VII)

東野 大八

北京川柳会

川柳の雑誌に載りながら、縁もゆかりもない独り合点の雑文ばかり書いては、いささか気もひける。そこで今月はちと川柳に係のある話を書くことにする。しかし、これも一昔前の北京の話だから、もとよりばつとしたものではない。

昭和十五年ごろ、私は北京の川柳句会に出席すること、まことに勤勉だった。というのは私の住みついたアパートの親爺が、笑鬼という川柳人だったからで、句会に出なければひどくご機嫌が悪い。下手をすれば溜つた家賃の強制執行にでも出そうな雲行きであつた。集るのは五・六人、大して筋の通つた人はいない、それというのは店子ばかりだからで、下手な義太夫をムリヤリ家主から聴かされる、落語の店子みたいなものである。集りがあると、また必ず私を遇をやらされた。勿論抜くとなると一人前なのは家主の句だけなもんだから、三光から平拔の半分まで笑鬼、笑鬼である。他が素人

ぞろいであるとはいへこうなると彼氏も万ざら悪い気はしない、名乗りをあげるたびに、エヘ、エヘ、と至極機嫌がよい。しまいにこちらがイヤになつてしまふのだが、後で必ず一ばい出して、君の家賃はもういゝよ、なんて酒のきげんでうれしいことをいつてくれる。従つてこの句会からはどうしても足が抜けなかつたものだ。ところがしばらくして前門街のナニワホテルで句会がたはじめた。集るものは、当主の和田黙然人をはじめ石原青竜刀、平松圭林、石長介、渡辺雨明、池田新朗、松尾小女郎、西村佳唱、やゝ遅れて古川柳研究の大御所森東魚が加わり、さらにおくれて品川陣居が登場するといふ左右両派口八丁手入丁のウルサ形連の勢ぞろいとなつた。従つてアパート天狗の笑鬼親分もさつぱり振わず、程なく旗をまいて不参の末、とうとうどこにかへ消えてしまつた。もちろんそのころは、私も一戸を構えていたので、鬼が消えようと蛇が飛び出そうと、さつぱり応えなくなつてはいたが……。

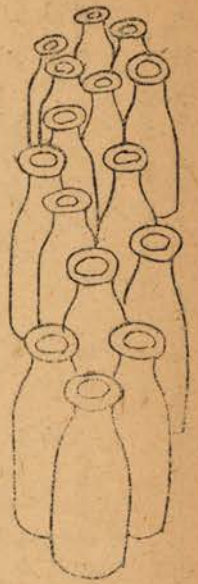
さてナニワホテルだが、この句会の庄巻？は黙然人と青竜刀両氏のかみ合せだつた。一方は詩川柳の総帥をもつて任じ、一方は非詩派の論客と自他ともに許している御仁。前者が詩派に似合わず至極現実的なやかん頭だが、ぐつと結んだ一文字の口やソリを打つた鼻柱はなかなかどうして後者の非詩派また下層の下に妙な毛などを蓄えて、豪放釈々たる押出し、まるで三国誌の袁彰と曹操の出会いながらである。だからこの両傑ブツのどちらかが選者となり披露に及ぶと相手方の句はただの一句も抜けてこない、見事全ボツである。しかし両者これを気にすることなく投句し合つていたのはさすがだつた。

句会果て、後、両者はよく議論し合つたのだが、詩派の黙然人さんは耳が遠く、青竜刀得意の辛舌も、ケロリカンとした顔付でいた。彼の便利つんぽにはかなわん」とと青竜刀さんも苦笑していたが、黙然人さんは黙然人さんで「非詩は川柳に非ず」

とダンゴと信じて憚らなかつた。黙然人さんは、よく私を電話で呼び出しては川柳の話をした。そして口癖のようにいつたことは「一番傘はヘマるし、川柳は前進する」ということだつた。あるときはまた秘蔵の短冊や色紙文獻を私に見せ、惜しげもなく私にそれらを譲つてくれたものだ。内地に私がかえつてからも、清水市から度々の便りを貰つた。一通などは便箋四枚に最近の心境句がびつしり書いてあつたこともある。黙然人さんが自らの生命を絶たれたというあの消息は、私の生涯には忘れ難い出来事の一つである。惚れている女婆はどこですの黙めてやれば女は窓へ付ち黙然人さんが、私のこの句をよく覚えていて手紙にこれを認め北京時代が懐しい、と結んであるあたり、何度読んでも私は胸が一ぱいになる。

東魚さんは青竜刀さんの紹介で、北京に赴任されると同時に逢つた。王府井のシナ料理屋でめしを食つたことを覚えていた。顔がうらなりの冬瓜みたいにむくんでいて、この人は永くはないな（地下的の東魚さんよこの悪口を許し給え）と思つた。程なくその通りになられ、まことにお気の毒だつたが、柳論はさすがに脊骨が通つていた。いかけ屋はすてつべんから

たほこにしこれが古川柳では一番傑作だといわれたことを一つ覚えに頭に残つていた。陣居さんは私が兵隊に行つてから前任され、魯迅の弟周作人を引つぱり出し、北京で国際的川柳展を開いた、という便りを貰つたが、さすが新聞人だと感心した。青竜刀さんは、私の結婚式の際、親代りになつてもらつたほどの人で、大陸生活を通じて今日まで、私は肉親的な愛情を抱きつづけている。それだけに、先般東上の際、彼氏にお逢いしたときは、何もかもが胸が一ぱいで、ロクに話も出来なかつた。華北事情案内所長を最後に内地へ引揚げ、現在の哀しい勤めぶりにある氏を見たときは、誰しも人生流露のはかなさを感じるにちがいない。そんな私とも知らず、彼氏は神田の飲み屋で、納々として得意の「四郎探母」の台詞を口にするのである。「私は青竜刀のサヤです」といわれた、この彼氏の奥さんに私はもう十年近くもあわない。青竜刀さんより、私は奥さんの方がずつと苦勞人だと思つてゐる。「大八、石原青竜刀論を待つてゐるよ」



川 柳 ベニシリン

北 川 春 巢

一、前 が き

ベニシリンの名前を知らぬ者は、現在あるまいと思われるが、その歴史を知る者は少いであろう。ベニシリンの発見者は英国の、アレキサンダー・フレミングで、一九二八年（昭和三年）に初めて発表されたことは、小学校の上級生の方がよく知っているかも知れぬ。一般の人々が初めてこの名前を聞いたのは、一九四四年（昭和十九年）春、当時の英首相チャーチル氏の肺炎を報じたブエノスアイレス特電であつた。それから我が国でも研究が始められたらしいが、当時は戦時中のことゝて、委しいことは発表されず、一般人はもとより、医者も大部分は知らぬまゝに時が経つていつた。当時は外国幣禁制で、ベニシリンのことを「碧素」と云つた由であるが、終戦後碧素の名前は追放せられて、ベニシリンの名に戻り、

昭和二十年の秋頃にはもう、地方人の過ばれた者はその恩恵に浴するようになり、その盛名は我々医者の耳にも達するようになった。川柳人もいち早くこれに眼をつめて、ベニシリンに関する句を作っている。我が国に紹介されたベニシリンは、チャーチル氏の肺炎からであつたが、素人には矢張り先ず淋疾に対する効き目の方が驚異的であり、有難かつたのである。淋疾を対象にした句が多い。が又川柳と云うものゝ本質が、そう云う対象を詠むのに妙を得ているとも云える。ベニシリンは淋疾や肺炎のみならず、一般に主として球菌を原因とする病氣、おでぎにでも扁桃炎にでも、その他もろ／＼に卓効があるのであるが、そゝなるとも素人ばなれして、素人の川柳人の手におえない。

私は古い川柳から、医者でない川柳家がベニシリンを題材にして詠んだ句を集めて見た。

二、淋疾とベニシリン

川柳家の注目したのは前述のように、先ずベニシリンの淋疾に対する効果であつた。私自身は皮膚科の専門でないで、淋疾の最新の治療法などもよくは知らないが、ベニシリン療法を行つても、抵抗菌が出現して、何パーセントかは治療に抵抗するらしい。が矢張り大部分は治るのであつて、素人目には非常によく効くと思つてゐるらしい。

ベニシリンあつて人生太く生き
和男
到る所青山ありベニシリン
白鬼

以上二句は、ベニシリンがあるから、悪所遊びをしても大丈夫だ、と云う安心感を強くうたつた句で、ベニシリンが出来てから風紀が乱れたとも云われる所以である。一般の人はみんなこのような氣持を持っているので、ベニシリンある限り「到る所青山あり」である。抵抗菌の心配をしているのは医者だけと云えよう。

ベニシリン弱つてござる
茂
男前
ベニシリン注射へ家の軍
善市

以上の二句は、「ベニシリン」と云う語で、「淋疾」又は「性病」をあらわしているのである。前句は弱つて「ござる」と云い、「男前」と云つて、少しヤユした所がある。

淋病で弱つてござる男前としたのでは、単に報告に終つて味がなく、「ベニシリン」とした所がよい。後句は自家用車でベニシリン注射に乗りつけた重役が社長の性病を詠んだものであるが、その頃はベニシリンが高価であることは常識だつたので、此の句は、金においといはないが、矢張り弱つている重役・社長を詠んで、川柳人は皮肉の笑いを浮べていたものである。

看護婦に顔を見られるベニシリン
裕康
ベニシリン人様の春楽しそう
義人

この二句の所まで来ると、ベニシリンももう一般庶民のものになつてゐる、と云えよう。気軽に我々のポケット・マネーで打つても病名が決つて、ベニシリン注射に腕まくりをする所を看護婦に顔を見られるのは、何となく嫌である。看護婦の方は一向平気で事務的であるが、患者の方が氣を廻しているのだ。この句も「ベニシリン」で「性病」をあらわしていることは前の句と同様である。後句は性病のためにベニシリン注射に通ふ身の不幸をかこつてゐる句で、これがベニシリンである所にこの句の生命がある。或は洗眼に通つても、カルシウム注射に通つても、通ふ患者の心持は同じ「人様の春楽しそう」であらうが、「ベニシリン」「性病」と云う所に読者を引きつけるものがあるの

三、肺炎とベニシリン

宣傳はチャーチルがしたベニシリン
居寒

ベニシリンの名を我々が初めて知つたのは、前述のように、チャーチル氏の肺炎からで、確かにベニシリンはよく効いたもので、重症の患者を持つ家族は、死ぬ前に是非ベニシリンをと、必死に探し廻つた。所がベニシリンは当時非常に高価であつて、先ず一〇万単位一万円、現在の貨幣価値から云うと、七万円位と云うことである。此の項で詠まれている句は、ベニシリンがよく効く、と云う外は大部分ベニシリンの高価なことを嘆いている庶民の声である。

ベニシリン人參と似た義談
千之助

アサヒビール

いつでも どこでも
三ツ矢サイダー

ベニシリン葬式程の金が要
り 鼠宝

親の病氣を助ける人參をかうた
めに、娘が身売りをすると云うよ
うな話は、古川柳にも出て来る
が、前の句はそれに似た「美談」
がベニシリン入手の際にも出て来
たと云うのである。後の句の「葬
式程の金が要り」も、或は葬式を
する方が安かつたかも知れぬので
ある。

ベニシリン時間キツチリ婦
長来る 蘇堂

現在ではベニシリンは、「油性」
又は「複合水性」と云うのがあつ
て、一日一回だけの注射でよいの
であるが、当時は一日の必要量を
六回から八回に分けて、即ち三、
四時間毎に一回宛注射をしていた
のである。注射をする方も大変だ
が、受ける方も大変であつた。こ
の句は、三時間なら三時間「キツ
チリ」に「婦長」が注射に来ると
云う意味で、ベニシリンが如何に
貴重品であるかを表現して余す所
がない。

でも無理におすゝめはせぬ
ベニシリン 勢火
効能を母にくどくベニシ
リン 光波

金策はとも角ベニシリン打
つときめ 杜的
第一句は、医者が往診に来て、
診断は肺炎、ベニシリンがよいこ
れとすゝめてゐる。高価なものな
あるから、一通りすゝめておい
て、「でも無理におすゝめはせぬ」
と云つてゐる所、あまり重症では

ないらしい。第二句は、医者の言

葉やらの噂などで、この病人に
ベニシリンがよいことは分つた
が、母に納得させて金を出させる
のにくどく説明してゐる所。
病人は父であらうが、母の顔は
「そんなに金を使わなくても……」
と云つてゐる。第三句は、大金の
あるが、この句は、この時代より

松山市 前田 伍健

捕虜のよう歩く消防見張台

奥様の唄テブコーダーけなしたり

或時は人を雑草と見てかなし

秋はよし見ても食べても歩いても

金沢市 安川 久留美

総入菌隠元豆のすちを出す

大阪府 橋本 緑雨

郷愁もないのに寄附を言うて来る

美しく生れて拗ねることおぼえ

東京都 富士野 鞍馬

停年のこのごろは暮が強くなり

モデル今日色氣がすぎて断られ

修道尼やはり銀座をあるいてる

新婚の一ト月程は日記書く

同舟近詠

金策問題は後からにして、「とも
角」ベニシリン注射をすることに
めめた所、何れもその状況がよく
出ている。
事なげに醫者がすゝめた
ベニシリン 万的
ベニシリンに變える合服包
むなり 伸路

少し前によく見られた、「米に変
える」「合服」よりは幾分気分が
らくに思えるのである。
ベニシリンあると云うのに
灸をすえ 工鬼
この病氣は肺炎ではないが、こ
れもプロレタリアの嘆きであら
う。

四、結 び

ベニシリンに始つた抗生物質研
究は、現在ストレプト・マイシ
ン、オーレオマイシン、クロラン
フエニコール、テラマイシン、エ
リトロマイシン等の次々の発見に
よつて、化学療法最盛期にある
ように思われる。我が国に於いて
も、コリスチン、チオルチン等の
抗生物質が発見せられ、発売せら
れてゐる。これ等抗生物質は、作
用する菌の種類が夫々決つてい
て、夫々効くと云う病氣が決つて
ゐるのである。然して現在ではベ
ニシリンはもう、ありふれた普通
薬になつてしまつていて、感冒に
でも使用されるし、川柳人の眼を
引くこともないが、盛んに病人を
治してゐるのである。

ベニシリン時代に君の舊弊な
没食子

こゝ一、二年「原子力時代」と
云う言葉がジャーナリズムによつ
て盛んに使われるようになった
が、それより以前、昭和二十五年
にこの句は発表せられてゐる。
「ベニシリン時代」とは、「原子
力時代」と云う語と同じような意
味の言葉で、ベニシリンもこゝ迄
来ると、もうベニシリン本来の意
味を失つてゐる。

筆者ははじめに、素人の句を集
めたと云つたが、この句の作者没
食子氏は、薬剤士であることを申
添えて本稿を終ることとする。

謹んで風水害の

御見舞申上げます

九月二十五日に本土を襲つ
た台風十三号の報に接し、謹
んで各地の愛読者各位に御見
舞申上げます。

昭和廿八年九月廿六日

川柳雜誌社

感謝

なお台風十三号は当地もお
しうばんで相当に被害が
ありましたが、弊社は同じ
住吉区でも少し高地なので
水の心配は全然ありません
でしたが風當りは相当に強
く一時は危険を感じまし
た。が幸い軽微な損傷で風
もおさまりました。各地の
愛読者諸賢から多数見舞狀
をいただきましたことを感
謝いたして居ります。

編輯局にて

麻生路郎

(終)



選郎路

たかがプロ野球に初号活字なり 貝塚市 早川 野甫
 セーヌよりわがせうらぎの美を語れ 同
 頂上で五分ほど耐え征服記 同
 悲しみを蛙クロクロとしか鳴けす 同
 くどくど悪童をほめ酔っている 同
 長子には不況を知らしておく決め 同
 スト前夜誤字激烈のピラ届く 大阪市 木谷 秋窓
 停電が僕を抒情の詩人にし 同
 買うて見たが谷崎源氏積んで置き 同
 蠅も亦ジャン／＼横丁の菜を知る 同
 生駒山上寒冷線の蚊に喰はれ 同
 今にまだ蟻は徒歩主義励行す 和歌山市 秋月 宏方
 毒ばらの様にも見ゆる口紅よ 同
 自轉車は我が家一つの機械力 同
 ハイキング嫁ぐ日なども話しつつ 同
 床の上で散るとは花も知らなんだ 同
 ネットレス似合はぬ顔やと言え 吹田市 梶川 蘇堂
 艶聞もちよつびり挿む一代記 同
 視察見学今日もガリ版酷使され 同
 土砂ぶりにそこまで來てる電話なり 同
 球根を買うに判コが三つ要り 同
 父を呼び母を呼ぶ声水に消ゆ 貝塚市 高崎 雄声
 夏の雲早く夕立持つて來い 同

頼むことなければでんで寄りつかず 同
 電車降りてからもう一度ウインクし 同
 釣をみているの遅刻とは云えず 倉敷市 野田素身郎
 便所で聞いているとは知らずラジオオキ 同
 年よりの日が氣に入らぬ程元氣 同
 虫の音へもうセンチにはなれぬ年 同
 バックミラー僕も疑われる一人 貝塚市 宮本 甲馬
 水でも打つたるか向いばかり賣れ 同
 丸金アワーおい奥様と言ってるぞ 同
 素うどんのまだ恥しい妻でよし 同
 附添へ不満を洩らす息が切れ 貝塚市 小島さぎす
 親の子か此の子も隣りの子を泣かし 同
 姉さんの見立てたセルで逢いに行き 同
 故郷へも寄れど社長の暖かし 同
 公判の隅に母居る妻もゐる 岸和田市 高橋 操子
 家政婦の素足きれいな坐りだこ 同
 因縁となづけて不義な恋をする 同
 苦心した金とは母の書いてゐる 同
 不利益と知つてかさんと寄りつかず 宮崎市 野口卯之助
 きらわれているとは税吏知りつつも 同
 美しいその手男をまどわす手 同
 劣等生鉛筆なめてばかりいる 同
 梯子酒ついでに行くべきとこえ行き 姫路市 難波 愁夢
 かけ取の女ウインクして帰る 同
 遅う來た藝妓拍手で迎えられ 同
 父ちゃんは頼りながれて留守をする 同
 ブルジョアの犬が身なりへはえて來る 大阪市 後藤 志津
 そんな了簡やかだと純情憐れまれ 同
 貧乏なくせに呉れとはよう言はず 同

……続・私の柳友其他……

永遠の友二山

安川久留美

私の最も信頼し、いつも忘れられぬ人に京都の紀二山君がいる、初対面はどちらも二十五才、もうお互いに還暦もすぎ、あえば昔の話も出て懐しい。最近おうたのは昨年の晩春、態々病床を見舞つてくれたのも嬉しかつた。二山君は京都人に似ぬ男らしさがある、お上手のないザツクバラン調であるが、言葉に真実がこもっている。私は却つてその方に好感がもてる、お互いに百里の山河をへだて、いるから一度あえば次はいつの日か、心細いようだが、最後になるかも知れない——と思えば尙更私は死ぬまで二山君の姿に合掌する。人間二山の性格は永遠に私の腦りを去らないものである。

没食子と私

水谷 竹莊

僕と没食子君との交りは僕が逋信病院に勤務する様になつた昭和十七年の春で、もう十二年程前の事である。その頃「川柳雑誌」を愛読していたので、柳界の便りのところに市場徳次郎氏逋信病院に奉職の記事を読んで、同じ職場に川柳家が居るとは有難いと、早速面会に行つた。その時が初めてで

松尾 天信

ニキフ
にきひとり
美顔水
徳谷順天館



船酔いの母の分まで平げる	同	泣き虫の頃から自叙傳書き始め	岡山県 小林 夢介
歩行器を提げて乗り込む革靴	同	愛情が娘をだん／＼派手にさせ	同
客筋も宗右衛門町は自家用車	貝塚市 津田 干舟	親父から御座無候と返事が来	同
自らを半處女と言う娘にあきれ	同	頼もしい併し驚く食いつぶり	今治市 長野 文庫
新町で出てたを二号鼻にかけ	同	愛國の看板かけて居るけれど	同
本一つ買へない自由社會なり	貝塚市 福島 丁坊	別に意味は無いがロシヤ語を嚙つて見	同
刺青をいれるに似たりアロハシヤツ	同	ペンネーム言えば子供も知って居る	岡山県 光好三四詩
ウインクに應えてあげたら逃げた	同	長女もう父のさびしき知つて居る	同
百万円夢をえがくにもう足らず	和歌山県 浅川 桑南	子があるからなどと哀れな弱い恋	同
戦争のおかげだつたと外科もやり	同	自惚るるところが憎いイヤリング	愛知県 岩川 寛虚
新聞社救ひ求める手を撮し	同	人氣者どこか抜けてるごことがよし	同
寝ころんでいろを養ふ金もち	大阪市 石川ひさみ	カロリーの音よし夕のフライパン	同
石切さん縁切までも頼まれる	同	さば／＼と出来ない心釣銭を待ち	大阪市 有本 文史
ネツクレス恋のないのがち／＼	同	お女将ます起きてヒスめく乱れ髪	同
黙否権明治生れに出来ぬ藝	福岡市 岩田十三楼	お義理でと言ふてパ／＼さん酔ふて来た	同
デモ隊の列に我子を見つけ出し	同	書留の判くのださいの声もよし	大阪市 不二田二夫
貧乏が兎角先祖の事にふれ	同	郵便局のペンに政治を見せられる	同
公聴會飲んで喧嘩をして別れ	尾道市 渡辺 逸	強そうな酔つばらいには避けてゆく	同
海育ち電話の音が大き過ぎ	同	婦警さん往來へ猫抱きに出る	佐賀市 南川 光男
打算する心か邪魔な恋だつた	同	コンバクトまだおしやべりが止められず	同
客へ母どこからあんな声出して	大和 戸田 悦子	指切は金を目當てにするマダム	同
濡れタオルさげて三本立くぐる	同	生駒から見れば千日あるやなし	貝塚市 芝原 洋史
パチンコじやないぞと念を押す土産	同	人を焼く丘にアベツク話し合い	同
妻の白髪秋は淋しいものと知る	出雲市 森山 莊	強いこと言ふて女は處女のまゝ	同
死ぬ程の恋とは知らず意見する	同	これ以上もう頼まないのも男	愛媛県 米沢 曉明
たわむれに女給を抱けば切ながり	同	妻かえる里へいつてた事にして	同
逆境にえがいた眉が細長く	岡山県 多田野保子	仲人へ抗議人形じやありません	同
貸す氣ではなかつた金をくやしがり	同	無邪氣さはほつて来たのか靴磨	大阪市 谷 一平
中絶をしたとは見えぬ靴をはき	同	モデルには似合つた筈のこの浴衣	同

言いだすと気が大きくなつて、酒持つて来いとやり出されると、そろ／＼メートルが廻つて来たなと思う。そして例のチョコビひげをなでながら、都々逸の明鳥、落語のボーヤは没食子君の十八番である。こんなかくし芸の持ち主とは柳友諸君の中で知つてゐる人は少いと思う。また一面非常に人情深い、どんな相談にも乗つてくれる。僕が発行した竹莊居雜叢、竹莊銀婚句集に、友情あふれる序文を書いてくれた。戦後、物資のない時分、二人で漬物を買つたり、味噌を車で運んだり、關市へ店を出しに行つたり、二人で苦勞をしたのを思うと、とても愉快だ。病院で同じ日に宿直の夜、よくホルモンを買つて来てよせ鍋を、つゝいて川柳談に花を咲かせたのも、楽しい想出の一つである。その没食子君も今日では淀の通信病院薬局長に榮転して、大阪の病院を去つたけれど、毎月鳥ヶ辻川柳會には、必ず出席してくれる。そして僕の息子の嫁をさがしてくれている。有難い柳友である。

観音まいり

藤本 茶々

四万六千日！ 七月十日は観音様の功德日、この日にお詣りすると四万六千日お詣りしただけの御利益があるという、私もその莫大



金ためる一家へ軽い母のねたみ 米子市 勝田 正郎
 ベースアップまで一年の長いこと 同
 残暑とか團扇そろ／＼くたびれた 大阪市 清水 望峰
 末の子が足手まどいの引越日 同
 伏兵が飛び出しそうな淀の葦 大阪市 中村 一
 再會は夢の若さと喰いちがい 同
 こほろぎを聞きつゝあわせ縫い上り 大阪市 佐藤 房子
 パチンコの言いわけがたつ俄雨 同
 心中行同じ死ぬなら夏の海 大和 岩垣 日本村
 のんびりと遊べど医学博士なり 高田市 同
 デモの列今日は外科医の窓から見 岡山県 岡田 青果
 雷を祖母はけものにして話し 同
 日稼ぎは馬鹿にされると盗をし 岡山県 池田 古心
 信心にかこつけ色を撒く女 同
 二日目は宿の浴衣で逢ふて居り 京都市 高岡 薫
 氣を持たせ過ぎて女は他所へ行き 同
 思春期の手紙詩を書き歌を書き 津山市 三木 香平
 何もかも節つけて読む齢になり 同
 先輩に語尾を濁して疑われ 出雲市 久家代仕男
 離縁沙汰その小伴は俺が見る 同
 代筆で出せば母親とんで来る 大阪府 仁科 高峰
 絶安の胸に郵便を渡される 同
 柿の葉の餅を召されと隣より 石川県 桑山 ことよ
 捨られた其れからバンバン志願する 同
 コスモスがこつそり秋をつれて来る 神戸市 小倉 へんち
 傳統を守り時代とすれてゆき 同
 口丈けの若さで押した足もつれ 大阪市 深見雅樂太
 老らくも燃して見度い仇つばさ 同

ちとヒント與へば女思ひ出し 大阪市 三木 泡起
 酔つて寝て又も手形にうなされる 同
 入院の母
 久に會ふ子の智慧づきに涙ぐみ 和歌山県 植田てる子
 男手の慾し水害のひきしあと 同
 水害地汽車ぎし／＼と橋渡る 和歌山県 久保田青竹
 宿題を母から父へまわされる 同
 前任者はこうして呉れど氣に喰はす 鳥取県 亀崎 漫歩
 親のある生家は矢つ張り好い所 同
 曲変り踊り変らぬストリップ 大阪市 兒島與呂志
 座り込もう飽いて来て雑誌見る 同
 新妻の寝巻姿も僕のもの 高知市 小松 茂春
 お土産は実用向を選つて買ひ 同
 名も知らぬ花の白さも秋のもの 岡崎市 稻吉 佳品
 捨て切れぬ怒りを胸に米を研ぎ 同
 アルバイト子の同窓でなみだぐみ 広島県 御戸 凡平
 無口かと問へば不平だけは言い 同
 父の日へ贈るネクタイそつと買ひ 和歌山県 田中無津美
 落ちぶれてからも女房はを張り 同
 叱られて鏡の妻はちとあわて 和歌山県 貝岐 瀑子
 紀勢線山かさわけて突走り 同
 秋風の中へ粉薬捨てにやり 玉野市 渡辺あきら
 マージャンの洗牌シジミを洗ふよう 同
 常連へ娘半裸を憚らす 出雲市 原 獨仙
 健忘症笑ひ合いつゝ共白髪 同
 屋根仕事造器用さを買われてる 大阪府 森本黒天子
 常識を失ひかけた娘と遊び 同
 議題より帰る列車の時刻くり 岡山県 佐々部満佐志

吊しビールでも楽しもうとするつ
 もりか、若奥様風の人の手をさし
 のべている姿。名々にぶらさげた
 はおずきの鉢の風鈴が折からの風
 にチリン／＼チリン／＼と涼やか
 に鳴る中をブラリ／＼と帰途につ
 く。浅草の飲茶街六区、エロの
 街、グロの街、与太者の街、もう
 そこは敬遠して次の機会にゆずつ
 た。

浅草の六区はよけた子供
 連れ

BK放送川柳

入選句發表

課題「ハイキング」

佳作 北川春巢選

苦勞したところが楽しいハイキング
 大阪市 藤岡 凡集

赤チンもバックに入れたハイキン
 グ 和歌山県 美野百合子

馬鹿にした婦人コースにマメを出
 し 豊中市 石井 黙平

ハイキングアベックに逢い雨にあ
 い 神戸市 野村 初甫

野菊まで珍らしく見てハイキング
 徳島県 宮本 末男

ハイキング強力となる黒一点
 大阪市 末松 耕児

赴こされて服む水薬八つあたり
 貝塚市護川 梶

— 22 —

上役が疲れハイクは雇にする
神戸市 馬詰苦業公
ジャズ調にリユツクがゆれるハイ
キング 東京都 竹内しげ子
別荘がこゝらにほしいハイキング
玉野市 渡辺あきら
ハイキング村の子ども撮つてやり
兵庫県 中村とみ子
ハイキング途中で乗れるコース選
り 大阪市 奈倉 楽甫
ハイキングバスに抜かれてから疲
れ 神戸市 宮前 鳥居
ハイキング捨てた吹がら念を入れ
和歌山県 井上 晴天
ハイキング五臓にしみる水を飲み
兵庫県 家沢 芳花
平社員ハイキングだけリーダー格

入賞第三席
へしやがつたにぎりが美味しいハイ
キング 兵庫県 吉原 紅月

入賞第二席
ハイキング映画のような嵐来る
舞鶴市 井詰 夢聲

入賞第一席
青空へ向つて歩くハイキング
大阪市 増 つる子

(九月十四日放送)



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔八〕

歸化しても唄は二上り

三下り

(草一郎)

作者はホノルル在住。この句は作者自身が歸化しての実感か、どうか、それは判らないが、歸化法案がパスしたので、ドヤ／＼と多数の人たちが歸化した事実がこの句を生んだのであろう。在外の日本人が急にアメリカ人になつたからと云つて、その日からすぐ生活のすべてが、あちら式になるものでもないし、又しなければならぬものでもない。たゞえ洋館に住んでも疊の生活は忘じ難かろうし、食卓上の刺身や天麩羅へその日限りに左様ならをするものでもなからう。矢張藝者遊びもするし、三味線の魅力に陶酔もするのである。しかし私はアメリカ人だと思ふと、くすぐつたい気持ちに襲われずに

〔九〕

手作りの胡瓜はつむじ

曲りなり

(草右)

通勤のひま／＼に作つた手作りの胡瓜。日々のお野菜には事缺かぬと、自慢の品でもあるが、作品としては細長くて曲りくねつて三等品であることに間違ひはない。あゝ、多くして効すくなくしかと、あるじをして苦笑せしむるに充分なのである。ユーモラスな句である。

〔一〇〕

奢られる弱さ奴が好き

といふ

(しげを)

「どや、なんでも君の好きなものを」

と、腰かけで、一パイやつてゐるのである。

「遠慮せんかてエ、で」

「では、やつこをもらいまつさ」

と、値段書を横眼で睨んでの注文。やつこは値段書の最下部に属すること云うまでもない。調子に新味はないが、人間がよく出ていて面白い。

〔一一〕

三等がよいとおふくろ

困らせる

(多久志)

「何も二等へ乗らなくてもよいがな。早う着くと云う訳ではなし、そんな勿体ないことせんかて、ワシは三等の方がなんば氣楽かわかりやアせん。第一お金のめくりと云うものがある」
と、云い張つておふくろは決して二等へ乗るとは云わなない。これがおふくろの心理である。

この句は意味から云つて「おふくろ」の次ぎに「が」を入れるべきであるが、それは調子が悪くなるので「が」を省略したのである。かりに、「を」を省略したものど解すれば、句意が變つて來る。まことに輕微な瑕疵ではあるが、斯うした省略には注意を要する。

麻生路郎著・田村孝之介装幀

路郎句集



定價 書 菊
留 半
百 八
圓 百
圓 七
頁 余 七

豫約特價を締切り
定價に復元——殘部僅少
即時御申込みを請う

わが川柳界の巨匠麻生路郎先生の川柳生活五十年記念事業の一企画として各界名士名家の御賛同を仰ぎ路郎句集刊行会を結成、路郎句集「旅人」の予約特価申込を發表いたしましたところ忽ちして予定数に達しましたので役員一同感謝感激いたしました。就きましては規定方針により九月末限り予約特価を打ち切り定價に復元することに

いたしました。尤も予約期間を逸しられた方々のため僅少部数を保有してありますので、御希望の方々は至急定價によつて御注文をお願いいたします。
なお本句集は十月二十日刊行の予定でありましたところ、編輯性の路郎先生のこととて、纂慎重を期せられ予定期日に脱稿し得られなかつたため約一ヶ月位刊行が遅れる見込みであります。この点早速御予約下さつた方々に特に御諒承をお願いいたします。
(刊行委員長 市場漫食子)

麻生路郎川柳生活五〇年記念

路郎句集刊行会

発行者

會長 中島生々庵
大阪市西區三休橋町 中島小兒科診療院内
大坂市住吉區西代四五の二五
大坂市西區三休橋町

發行所 川柳雜誌社
大坂市西區三休橋町 大坂七五〇五〇番

著者の言葉

いよ／＼私の句集が出るのになつた。或る意味に於ては私の血と汗で詠んだ結晶だとも云えるが、それにしても私を満足せしめるだけの作品集だとは云えない。その点に

(一二)

祝おはん駄菓子屋開店
千客万来五圓十圓二十圓

(自由朗)

おはんが駄菓子屋を開店した。人氣もののおはんが開店すると同時に、来るわ来るわ、青鼻を垂らしたお客さま、エブロンをドロ／＼に汚したお客さまが店を埋めつくした。実に光景が躍如としている。「五円十円二十円」がウンと利いている。古句に「千客万来皆來ると困まるなり」と云うのがあるが、この方は小料理屋の方で大供の千客万来を詠んだものである。この句は五円十円二十円で、こどもであることが瀟然としている。一読ほほえましさを感ぜられる。漢字ばかりの表現であるのも面白いし、調子もテキハキとしている。

(一三)

鼻かんで貰つて敬老会
に出る (鉄洲)

「おちいさん、あんた、きょう敬老会のおよばれやな」
「何云うてんね、ちつども聞えんがな。」
「ケ、イ、ロ、ウ、カ、イや云うてまんね。」
「ああ、そうか、きょうやつたな」
「もう、そろ／＼行く時間

ですよ」

「オー、そうかい、もう行く時間かい。」
「あんた、鼻が出てまんがな。」

鼻をかんでやる情景が巧みに描写されている。

(一四)

空巢かと思れば極道歸
つとり (鉄児)

ガサ／＼、ゴソ／＼と音がする。テツキリ空巢が這入つて来ると、ソツと上つて覗いて見ると、極道息子が戻つていた。又例によつて質ぐさを探がしているのである。この句の表現で「見れば」は少し固い、むしろ「思や」とすれば感じが幾らか軟くなつて救われると思う。「盗人を捕えてみれば我子なり」の古句は夜で、この句の場合は晝である。共に子どもに對する愛情を内在しているところに句としての味がある。

(一五)

薔めようとすれば花咲
き鳥歌い (ただみ)

金と云うものはちよつとや、そつとでは溜まらないものである。溜まらないものを薔めようとすれば、花が咲くのが鳥が歌おうが見向いてはならないのである。と云うこ

とは判つてはいるが——と云うところを巧くつかんでいる。この句、「花咲き鳥歌い」のリズムカナル調子が、いのちなのである。

(一六)

見世物が明治の色で來
る祭 (十九平)

覗きやサーカスが臨時にやつて來る祭と云うものをハツキリとつかんでいる。時代錯誤の見世物が、いかに祭を祭らしくしているかを見逃がさぬところに、作者の眼の凡でないことが知られる。「明治色」とは巧みな表現である。

(一七)

招かざる客に飲まれた
祭り酒 (しげ女)

お祭は來ても、花は活けず床の軸物も懸け替えない。せめてからだだけでも休めることにしよう。しかし、少し位の酒は準備しておこう。誰れかが來るかも知れないし、お祭だと思ふのに、まさかお茶だけで帰す訳にも行かないと思つて、果して「招かざる客」がドヤ／＼とやつて來たのである。想としては別に新しいとは云えないが、表現技巧の妙味を称えたい。

(つとく)

呪たるものを感じずにはいられない。しかし、これが私のせい一ぱいなのである。

私のこの貧しい句集「旅人」を親しく読んでやろうと云う人達のあまりに多いのに、感謝せずにはいられない。有難う。

一般に句集の編纂は年代順に配列されているが本句集はそうした方法によらず、親子関係、夫婦関係の句を一つ編纂にしたり、恋愛関係の句を一所に収集したりしている。酒を詠んだ句は酒の項にとつた風に編纂した。しかし類題別にした訳ではない。年代

別は私の句の成長ぶりを見るには便利であるし、私自身が歴史的に回顧するには最適な方法であるかもしれないが、私はそうしたことをこの句集にのぞんではいけないのである。ところ／＼を開いて一句一句を味あつていただき私との思想の交流を切望しているのである。私自身も又諸氏の懐へ飛び込みたいのである。凡そいつごろの句であるかは比較的新しい句はすべて新仮名遣いに揃つてゐるから類推していただきたい。私としてはこの句集を踏台として更に一歩前進したい念願である。

麻生路郎選評

村川源之助装幀

山陽川柳

二八九 人作家集

総句数二二四七句

A5版 二二七頁
定価 二〇〇円
一六円

大数数の作家は新聞柳壇から生れた。本書は山陽新聞柳壇の作家の佳吟集である。選評は本誌の主幹麻生路郎先生である。本書を熟読することによつて初心者と雖新川柳の良き作家の列に入ることが出来るように編纂されている。一説を請う。

岡山府東中山下四〇番地

発行所

山陽圖書 K K

刊新最

取次御注文は

川柳雜誌社

大阪府住吉区西五丁目二五

電話 住吉 七五〇五〇



性という名で

川柳を作れ

品川陣居

これはすこし可笑な考え方であるかもしれないが、川柳作品の中に、その作家の「性」の強弱が表現されるものか、どうかということである。

川柳が生活を歌う詩である以上、人間生活の要素として重大な地位を占める「性」が自然そこに表われなければならぬとおもうのだが、これまでわれわれは川柳作品から、ことさらに「性」の表現を避けるような傾向があつたのである。

という、あるいは、いや、それなら「末摘花」というようなジャンルがあるのはどうしたんだと軽く反問されるかもしれないが、あつたものは、由來われわれ純粋作家にとつては異端のものであつ

て、もんだいにならないのである。世間の素人筋から、川柳といえは末摘花かニヤニヤされつけて来たことにたいして、われわれは本氣になつて抗議しつゝて来たのである。

したがつてわれわれが作句するにあつては、末摘てき手法をとることを避け且つ恥じてきたのが習性となつて、作品に自己を盛るにさいしては、露骨な性てき表現はおろか、ちよつと匂わせることにさえ忸怩たるものがあつたのである。このことは、果して作句精神を故意に歪めているのではないか、とおもわれるのである。

り、附け句をしているのである。男性の愛人杜國にたいする「おもい」をうたつたものとして有名な
 鷹一羽雲にかくるゝ伊良古岬(?)
 の句のごときは、表面には何も出ていないが、愛人杜國を鷹と見立てゝ、かれとの別離のおもいを籠めた意図によるものとされてゐる。
 いつも路郎先生のお作を引き合いに出して恐縮だが
 お女め将さんと云うてやるには少し若し
 あんたにプラスにならぬのなら考えるわと女
 二号をもつて子に意見せず
 (以上・七月号)の如き、そう申上げては何だか還暦をおすぎになつた先生のお作とは、ちよつと見えない色つば

さがあふれているではないか。じつに淡々とした手法でありながら髪つけ油の匂いが香ぐわしく鼻の先へ来て、ゾクツとするほどである。

話は別だが、今度、市川中車を襲名した、ぼくの旧友喜熨斗君へのお祝いの會が先月末あつたのだが、ぼくの生活基準が、昔の学校友だち——いまの社長、課・局長級のかれらの生活寮開氣と相容れないので、おもいながら、なつかしい彼らの顔を見る幸福にめぐまれないかつたが、中車君の現実の生活は、どんなにすばらしいものだろうとミームハ一族並みの羨望をかんじてゐるのである。いま中車君の新居は赤坂新町という花柳界のまんなかにあるのだが、令兄猿之助丈の新居もさいきん同じ場所に建つたというから、沢瀉(おもだか)屋ブロックが出来たものだろう。

戦後の藝能人の流行は、かれらの生活を古い表現を借りれば王侯貴族のそれにひとしいものたらしめているようである。そうはいつても中車君の襲名披露の物いりは数百万金と喧傳されていたが、それだけのコストはかけてもソロ

バンに合うところをみると大したものである。

ぼくがお祝いの會に出席しなかつたので席上、ぼくの噂も出たそうであるが、そういう場所へ出るということがウズウズするほど好きなぼくだから、出席できなかつたのは一そうみじめであつた。何も物欲しそくに宴席や歌舞伎座の廊下を飛び廻りたいのではないが、東京下町の生れで腹の底から「脂粉の香」におぼれた困つた性分であるぼくは、そういう「社會」(せかい)での人情にこよなくあぐられるのである。お茶屋のお女将さん、役者衆、藝妓衆といった概念てきにいつて色つばい人たちの「表」(おもて)の方だけしか知らないものであるが、ぼくはそれらのせかいの人たちを、必ずしも「金が物いうせかい」の人たちだとはばかりは考えたくないものである。税金の苦しみなどという「裏」のことは、ぼく如きでさえ月々数千金ぶつたくられてゐるのだから、派手なしようばいの人たちが新聞に年收数百万金と發表されていても別に驚くには當らないが、こういうせかいの人

たちがかす霧開氣の中には多分に性てきなものが含まれているのである。

川柳の実作者の中に、花柳界や藝能界の人たちがあつたら、ぼくが考えているような性てきな匂いがその作品に盛り込まれるであろうかと考えてみるのである。

俳句の方には有名な中村吉右衛門丈の作品がしばしばぼくらの眼に触れるが、これはあのすぐれたわざおぎとしての吉右衛門丈個人のきびしさが感じられるもので、およそ性てきな内容などありはしない。だが俳句の中にも

ひつたりとふすま閉めあり
ほととぎす 万太郎

というような、ぼくなどにはゾクツとする佳品があることを考えると、俳句の世界にも必ずしも求めえないものではないかもしれない。

今朝の東京朝日の囲みものに「去來の句碑に論争」という面白い記事があつたので、ちよつとぬいておこう――

「俳人向井去來の二百五十年忌が十一月六日から九日まで出身地の長崎で行われるが、この行事の一つの句碑建立で論争が起つてゐる。とい

うのは、碑に入れる去來の句『稻妻やどの傾城さかり枕』が、風紀上面白くない。傾城とは今の夜の女ではないかと、これはある縣議の意見。

これに對し、郷土史家たちは教養の深かつたむかしの傾城と今の夜の女と同一視するのは困つたものだとして反撃している。このある縣議、先年お蝶夫人にゆかりの碑を建てたこととがあり、傾城賛成派は『そんなこというならお蝶夫人は今のオンリーではないか』と騒いでいるが、まだ結論は出ていない。(長崎)――

むかし、ぼくは浅草の傳法院で催された浅草にかんする資料展というようなもので、吉原の傾城といわれるほどの有名な遊女たちの歌や俳句の散らし書をみたことがあるが、むかしは傾城遊女の身だしなみのひとつとして歌俳諧に身をいれたらしいが

君は今駒形あたりほととぎすという何代目かの高尾の作として人口にかいしやしているものなど、その眞偽はともかく一應は口吟に堪える傑作であるとおもう。

そこで、ぼく考えるのだが、本誌の如く、とくに大阪

中にその存在を大きく知られてゐる地盤を利用して、ひろく花柳、藝能方向に呼びかけて、その作句をしようらしいしたら面白からうとおもうのである。その企画には本誌傘下のおれきれきを煩わして、お名指しの藝妓衆やごひいきの役者衆に川柳の効用を説いて頂いたなら案外新分野が開拓できるのではないかと考

える。われわれの知りえない藝界、花柳界の機微が川柳作品化されるということは、まことに楽しいことだとおもうのである。

だがおことわりしておきたいのは、性「てき」といつても、世の紳士淑女方がいやらしいと感じるようなものではなくて、川柳作品のモチーフとして描かれる人物が環境におのずからにじみ出るような人間性の華やかな面をいうのである。

むかし万朝報という黒岩涙香の主筆していた赤新聞があつて、その川柳欄に

心中はさつぱり飲んで癡た
といふ

という投句のあつたことを三十年以上も前のこととして記憶しているが、これなどは心

中というような異状な事件に取材しながら、二人の最期を美酒くみかわして、しかる後にソノコトをしたであろうと作者が温くおもひやつてゐるので、まことに哀感の中に華やいだものを感じさせる好ましい一句となつたのである。

疑へば女の帯の蛇に見え
鮎美

八月号の川柳塔の水谷鮎美大人の、この心憎くさはどうだろう。女の帯を蛇と見るという一見、あまりにも通俗であるように見えて、じつは然らず、戦後女性の性てき解放にともなつて、女という、ぬめ／＼とした肌の鱗光が妖しく見なされるようになった今日、男はむかしのように安心してはいられないのである。

「疑へば」の上五が実によくキイテゐる佳吟である。まことに男性はすべての女性を疑うことになつたのである。恐ろしいことである。

妻の肩もめば自分がおかし
潮花

この句の生臭さはどうだ！おそろく閨房での一義のあとの情景が、ぬめ／＼とした妻の白い肩をもんでいる男の股間の有様までおもひえがかれ

るのは、ぼくの「いやらしいさ」からであろうか。
後妻でもよいわとしんみり
三十二 竹青

キンゼイの女の性慾報告でも、三十二前後の女の肉体の最盛期がいわれている。日本でも三十三を女の厄年として何か女性のあせりを具象しているのと思ひ合せてなか／＼味な一句である。

されば――
父でない人が近頃よく泊り
鉄児

ということにもなるのである。娘は母親が性「を」生活のコストとすることに、あえて潔癖を押し通そうとしないうし、母は娘の手前というようなことを考えようとしないうで、少しでも生活へのプラスになることを考えるという近ごろの風潮をズバリと簡單明瞭に表現しているところ、まことに胸が透くようである。

幸いにも路郎先生の傘下には、かゝる好作家が集つてゐられるのだから、ぼくのいう性「てき」川柳の收穫を期して待つのも、あながち見當はずれの要望ではないと信ずるのである。
短夜の夢きれ／＼に別れ妻
陣居



平清盛(二)

富士野鞍馬

永暦元年(一一六〇)は清盛四十三才で、平治の乱の敵將、源義朝の妾常磐の助命して、自分の愛妾にした。それで

禪尼の慈悲は一門のあだとなり
(タル四一)

古穴へ清盛首つたけはまり

(タル八〇)

清盛の鼻毛を世帯くずし説み

(タル四八)

清盛は尻みやのある後家を

持ち

(拾六)

等と詠まれ、「尻みや」というのは、「苦情付」というような意味で、その時常磐は二十三才の女盛り、つれていた義朝の子三人も、継母の池の禪尼の意見に従い、頼朝と共に助命した。その末子が義経である。

仁安二年(一一六七)清盛は五十才で、従一位に進み、武官で最初の、太政大臣となつたが、翌年十一月十一日に、病氣したので、太政大臣をやめ、出家入道して「淨海」と改名した。それで病氣は治り、爾後太政入道といふ、禪門ともいつた。

清盛の二女徳子は、高倉帝の後建礼門院で、その子が安德帝で、つまり孫にあたるのと詠まれている。

「平家物語」には

入道にあつちへいけとみことのり
(拾六)

清盛はきどくに孫をかわゆがり
(タル六)

という句も見える。

六波羅に、政廳を置いていた清盛は、赤い直垂を着た十四五才の童子を、三百人あまり、京都中へ放つて、密偵をさせていた。中々この童子は、京都市内で巾を利かし、カムロともいわれていた。もし平家の悪口でもいうものなら、このカムロにひどくやられたという。役人もこれには一目置いていた。

清盛の禿も来ては耳こすり
(タル六二)

六波羅の禿いつつけ口がすぎ
(タル五五)

千人禿京都ではにくがられ
(九八)

六波羅の禿も来てはいいつける
(六五)

それで、俊寛の一味や、頼政等の陰謀もかぎつけられたのであろうと

BK川柳の放送

北川 春巢

九月十四日、私は路郎先生の御推せんによつてBK川柳の選評を放送した。第二放送で朝七時半から十五分間「趣味の葉」の時間である。九月初めに放送局の方から選稿を受取つたのであるが、受取つて見て驚いた。応募のはがきが三〇〇通を下廻る少数なのである。以前に放送をされた方々のお話から、私は少くとも四、五百通はあるだろうと思つていたので、余り少いので驚いたのである。よい選者の所へは多くの投句が集るのには当然であるから、私の実力からはこれ位が普通なのかも知れないが、もう一つ考えるべきことは、放送の時間が悪いため、聴こるにも聴けないので、投句する人が減つたのではないかと云うことである。私が自惚れ強くも、この考えを取って主張するのは、現に私自身が此の時間を聴くのを忘れ勝ちなため、投句を怠つていたことを思い出したからである。これは何とかして、私達川柳人のために、以前のような日曜の朝ぐらゐに變更してもらわなければならぬと痛感した。それにはどうすればよいのか。路郎先生あたりから放送局へ話してもらうのも一方法だが、それよりも私達川柳人の声を放送局に聴かさなければならぬのではあるまいか。

選は慎重に行つて、佳吟十五句、入選三句を別掲の如く選出した。投句は近畿六府県は勿論、四国、中国、九州各地からのものも多く、東は東京、横浜、千葉、埼玉あたりから来ていた。即ち府県別に云うと東京七、愛知六、千葉、神奈川各一、新潟、埼玉各三、三重七、福井、富山各一、中国では岡山六、広島七、山口五、鳥根一、四国では徳島一二、香川三、愛媛二、高知一、九州では福岡九、大分、佐賀各四、熊本二、長崎、鹿児島各一となつていて、他は近畿からのものであつた。

原稿用紙に書いて、指定の十一分半に喋れるように家で数回練習した。学会の学術講演が大抵八分か十分位だから、これには慣れている積りだつた。九月十二日に録音に行つた。五、六坪もあろうかと思われる防音装置の狭い部屋の真中へ教養課の女のひとと聲向いに坐らされた時には、チトどきもを抜かれた。聴衆の面前で喋るのなら聴衆が少々多くても平気だが、シーンと静まり返つた部屋に茄子

「太政入道は、かやうに天下を掌の中に握り給ひし上は、世のそしりを憚らず、人のあざけりをも顧みず、不思議の事をのみしたまへり。たとへばその頃、京中に聞えたる白拍子の上手、妓王、妓女とて、おととひあり、刀目といふ白拍子が娘なり。しかるに、姉の妓王を、入道相国寵愛し給ひし上は、妹の妓女をも、世の人もてなす事な

のめならず、母刀目にも、よき屋造つて取らせ、毎月に百石百貫を送られたりければ、家内富貴して、楽しい事なめならず」
とあり、それで

親子三人寝てくらす御奉公

(タル八〇)

月をおまねぎ遊ばせと祇王

祇女 (七九)

祇王祇女味噌とうしほの間へ出る (五三)

等、この外にこれを詠んだ句は多い。

当時清盛は、西八條の別邸に居たが、また「平家物語」に

「かくて三年といふに、又白拍子の上手一人出で来たり、加賀の国の者なり。名を仏とぞ申しける。年十六とぞ聞えし。京中の上下これを見て、昔より多くの白拍子は見しかども、かゝる

舞の上手は未だ見ずとて、世の人もてなすことなめならず。ある時、仏御前申しけるは、
「われ天下にもあそばるゝといへども、当時めでたう榮えさせ給ふ平家太政入道殿へ召されぬ事こそ本意なけれ。遊び者のならひ、何か苦しかるべき、推参して見む」とて、ある時、西八条殿へぞ参じたる」

とあるように、十六才の美人、佛御前が押賣にやつて来たので、清盛の愛は佛に移つた。

清盛はほとけなぶりの元祖也

(タル五六)

清盛は仏せゝりを床でする

(二九)

清盛が安置したのはぬれ仏

(六九)

清盛が仏を闇に安置する

(六二)

六波羅へ番狂はせな仏が来

(拾五)

加賀骨を開き西八条で舞い

(タル十四)

清盛は仏のために迷わされ

(四四)

仏だけ坊主とかわす新枕

(六二)

イヨ仏さまと入道ほめたまひ

(五八)

それでお拂い箱になつた祇王は、去るに及んで、障子に

萌えいずるも枯るゝも同じ
野べの草いづれか秋にあは
ではつべき

と書き残して、母と妹と三人で嵯峨へかくれて尼になつた。この時祇王は二十一才だつた。

入道の前へ障子を持つて出る

(傍二)

ところが、佛もまたその翌年、清盛のものをぬけて、嵯峨に居る祇王親子を尋ね、尼になつて四人で暮したといふ

六波羅の仏で嵯峨に尼が出来

(タル四六)

これは余計なセンサクかも知れないが

寿永の代西八条へ流行つ子

(タル一四七)

という句があるが、壽永は清盛没後の年代で、これは誤詠である。また

浄海は常磐の方へ付たい名

(拾五)

後家が来て踊子みんな嵯峨へ

ゆき (タル二一)

も、時がながつてゐる。常磐は祇王、佛より前ではないか、そして浄海と改名したより前のことであろう。尤も浄海と上開とをかけた洒落ではあるが。

型のマイクを中に美しい婦人と一対一で閉込められて、然も調整室からは覗かれていますと思つと、自信のあつた心臓も稍々鼻を折られた感じだつた。精神病の中に狭い部屋に閉込められると恐怖心の湧く畏閉恐怖症と云うのがあつた。丁度その畏閉恐怖症にかかつたよう、誰か親しい者の名でも呼びたいようであつた。

初めに一度テストを行つたが、その声は心なしに少々ふるえていた。ストップ・ウォッチを見ていたその婦人は、時間が五十秒程余るから、外に何か云つてくれと云つた。五十秒ではどの程度のこと

が喋れるか知らぬが、云いたい事は原稿紙に書いてあるのだし、その他のことを云えば蛇足のような気がした。もう少しゆつくりやると云う約束で、本録音にかゝつたが、今度は丁度よかつたとの事で安心した。三十分足らずその部屋に入つていたが、出て来た時にはすつかり疲れた気持で、又肩の荷を下ろしたと云う気持でもあつた。かくして十四日にはいよいよ放送されたのであるが、自分で自分の声を聴くのも変なものであると云う氣持を初めて味わつた。

最後にもう一つ川柳の方々に申上げたいことは、私に寄せられた三百通足らずの応募はがきの中に約五分の一の六十通程は、病氣療養中と思われる方々からのものであつた。病氣と云つても色々あ

るが、これは胸部疾患の患者である。此の病氣は、本人は殆んど苦痛を感じず、精神活動に至つては、人並以上に出来るに拘らず、治療には長年月を要するので、退屈をかこちながら、長らく療養所の生活を続けなければならぬのである。こう云う人々に慰安を与え、病氣を忘れて闘病の長きに飽かさぬことは、医師のみでなく、一般社会人の義務ではあるまいか。その意味で川柳作句こそは、最も適当なものと思われるし、投句数から見ても療養者が如何に川柳を楽しんでいるかが分るのである。

N・H・Kにも「療養の時間」と云うのがあつて、病氣の症状、手当法などの解説をする他、療養者の俳句、短歌等を募集、放送しておられることは、敬意を表する次第である。所がこの中にひとり川柳のみ忘れられているというところは、私に納得の行かぬ所である。

私はこの際「療養の時間」の中に川柳を入れて頂きたいことを一般川柳人と共に叫ぶと同時に、全国の療養所で療養中の川柳人も、その声を放送局へ聴かせるべきであると思う。「療養の時間」は東京からのプログラムであつて、東京に適當な過者がいないと云うのならば、大阪には適當な過者が多数にあることを放送局は認めるべきである。



川柳の歴史

— 五月の巻 —

福田山雨楼編

主要事件、行事、人事動勢等

昭和二年五月二十九日井上剣花坊Aから「川柳と俳句の区別」を放送。同四年五月一日大阪道頓堀丸万ビルで夕刊大阪新聞社主催東西川柳家漫談大会を開催。同五年五月十八日函館で第二回海峽親善川柳大会を開催。同六年五月十七日天王寺吉田邸で番傘川柳社主催惜春庭宴遊句会を開く。同年五月号三味線草久良岐号を特集す、謝恩の意先輩の徳を讃えた美筆であつた。同七年五月四日川柳雑誌百号記念に「川柳の夕」を大阪朝日会館で開催。路郎、三太郎、水府の講演、川柳劇、長唄、舞踊などで成功を収めた。同月十五日大阪朝日新聞社楼上で週刊朝日創刊十周年記念川柳大会を開催。水府小太郎、塊人の講演があつた。同九年五月号巖松堂発行展覧誌に高須啞三味「川柳といふもの」十九頁を執筆す。同十四年五月四日ふあすど創刊十周年記念川柳大会を湊川公園市立勸業館で開催。

主要圖書の出版

明治三十年五月（以下何れも五月につき之を省略）内山龜太郎編

ら。同八年頼原退蔵著「雑俳前史、俳諧史の研究」が星野書店から。同年坊野寿山著「花柳吟寿山調一」が松花から。同年高坂太郎編「俳風柳多留全集上」が同全集刊行会から。同年糸岡正一著「川柳講座」が日本文学社から。同年藤本福造著「福造句集」が川柳叢書刊行会から。同九年永谷葉吉編「五花村句集」が同刊行会から。同年寺山青々庵著「青々庵句集」が大連から。同十年安藤幻怪坊著「川柳叢書」が成光館から。同年河柳雨吉著「雨吉句集」が川柳おもいで吟社から。同十一年前田雀郎著「川柳と俳諧」が交蘭社から。同年木村半文銭著「川柳を作ら。同十四年山崎涼史著「裂ける楊柳」が同氏から何れも出版。

主要柳誌の興廢

明治三十八年五月（以下何れも五月につき之を省略）川柳久良岐社から「五月鯉」創刊、三卷五号までつづく。同月川柳下萌社から「下もゑ」創刊久良岐派と対向した。同四十二年東京から「獅子頭」創刊、三卷八号までつづく。大正四年香川泉親音寺町から「ツクモ」創刊、三号まで出た。同年愛媛県百目紅社から「シツク」、同六年岡山から「青鱈」、同七年神戸から第二次の「柳太刀」、同九年神戸から「らく書」、同十年山口から「青蛙」、同十一年朝鮮

右大臣らによつて「神仙頌」、同年岐阜から「よのころ」が何れも創刊。同十四年岐阜柳書刊行会から「やなぎ櫛研究」創刊、昭和九年一月通巻一〇五号までつづいた。大正十五年横浜から「芦薺」復活。同年東京から「おひろめ」昭和三年山口県西人らによつて「あらし」が何れも創刊。同年金沢北都川柳社から出た「百万石」が六六号で廃刊。同四年静岡から「川柳するが」創刊。同五年京都の「葵」は「番傘」と合併。同年甲府から「川柳の友」、同七年高知県から星水らによつて「川柳村」、同年川崎市から「川柳ひびき」、同年大阪造幣局研究會から「いづみ」が何れも創刊。同八年東京から「柳声」創刊、七号までつづく。同年北海道根室から「川柳濡つばめ」、同年横浜から「しるこ」、同九年京都から「御所柳」、同十年愛媛県吉田町から「はた」、同十一年神戸三越から「川柳波止場」が何れも創刊。同年能代港町に「木の香吟社」創立。同年「東北川柳」は「川柳研究」と合併のため通巻一〇九号を以て廃刊。

（追補）大正十一年六月東京大成文芸社から「一二三」、同十二年一月秋田市から「鈴蘭」、同年二月京城から「川柳」が何れも創刊。

著名川柳人の他界

小島六厘坊（大阪）は明治四十

二年五月十六日二十二才で倒れた、自他共にゆるした天才で関西柳界を牛耳つた。宮島竜二は昭和二年五月七日二十八才で病歿、小康時代の作家。大島弓八郎（京城）は同月三十日五十代で逝く、大正川柳で活躍した。龜井万登（神戸）は同七年五月三十日二十九才で逝く。手塚北公（長春）は同八年五月十一日四十三才脳溢血で倒る。竹内黙笑（京都川柳街同人）は同年五月二十六才で病死。伊澤初勝男（東京きやり同人）は同九年五月八日逝く。金井逸氏（東京川柳紅吟社同人）は同月二十七日逝く。細野一軸（平塚）は同十年五月六日他界、甲府時代江戸鹿の子を發行した古句研究家。岩田郷左エ門（東京）は同月十一日永眠、明治時代福岡にあつて九州川柳社を興した。同じ日に木原白雲堂（柳澤寺佐賀支部同人）は二十五才で逝く。新井宇宙（長野、湯の村同人）は同十一年五月二十九日七十六才で永眠。豊田千竜斎（神戸）は同十二年五月十六日他界、明治時代から横浜でも活躍した。酒井大機（松山）は同十四年五月十九日五十一才で病歿、川柳支部幹事として敬慕された。中沼若蛙（大連）は同二十年五月十六日戦病死、川柳句帳舎通を發行した。（追補）相生笑菊（東京）は昭和二十年三月十日空襲のため警防団員として最後まで活躍中殉職。

一路集

親類

水谷 鮎美選

達筆な親類受付役をかひ 一夜
親類へ行けば子供で扱はれ 杏花
親類と言ふ名ばかりの年賀状 京一樓
禿けたなどの親類もいとが 一瓢
親類の縁を切るとはきついこと 天信
左巻だが親類は立派なり 木魚
意見頼むと伯父もうはき 無松
もう聞いて呉れぬ親類ばかりなり 嘉一
血圧の高き親類どし案じ 千容
親類の多い女で賑かだ 幹二
親類の四女といふに魅せられた 伊津志
親類へ墓をあづけてドル稼ぎ 万古
親類に頼らず母と強く生き 葉光
親類が外国にあり行きたい子 寛虚
親類の顔で群衆かきわけける 芳仙
青い目の親類を持つ破目となり 恵二朗
盛り場の近くの親類傘を借り 誠史
親類を出なけりやならぬ居候 卓風
いゝ親類だけを仲人言ふて去に 太路
親類で水餃きほどの味気なさ 辰始
親類がこんなに増えた地位となり 南天
親類が五月蠅くなつた門構へ 実信

親類が皆んなお医者で医学生 良坊
親類の派手な暮しへ自重する 岡山牛歩
親類が見捨てた頃に街の兄 凡平
落ちぶれて親類からも忘れられ 高志
課長さんの親類ですと耳打ちし ひでを
子の使ひ親類へ来て小半日 光郎
親類のはしくれ紹介状も書く 正郎
よこづけにして親類を見返す気 谷水
親類で水害にあふ不運な子 登志晴
親類の伯父が来ている良い話 貞子
親類は婿にする気の酒をつぎ 同
磨飾つた親類の子を奪ひ合い 夜潮
株の趣味遂に親類泣かしたり 同
親類を押へつけるも金が要り 日本村
親類ぢやないかと借りてから強気 同
佳・制服の誇り親類からスター 悦子
佳・親類は冷いものよガード下 春日
佳・親類と言ふ差入れへ涙ぐみ 七面山
佳・親類をまだ／＼増す娘が五人 十悟
佳・親類で固めて会社ストも無く 雅楽太
佳・親類が寄り合つてゐて酒となり 一平
佳・年回に分家せよ格を持ち 蘇堂
芳仙・親類の眼が美しい招待日 日本村
恵二朗・一微な親類ばかり城下町 谷水
誠史・親類の親しみ蚊帳に寝て話し 薺花
卓風・親類は祭りに行つたり来たり 山雨樓
太路・親類に嫌はれてゐる妻であり 賀峰
辰始・親類が向ふからくるチンドンヤ 方大
南天・親類で袴の紐を結びあい 尼崎夢生
実信・親類え棒の花を植へにゆき

失敗

菊沢小松園選

失敗は人の心の奥を知り 雅楽太
失敗は疲れもうけで寝てばかり 辰始
失敗を語れる程に成功し 不漁佳
失敗は故郷の山も売る話 牛歩
七転び八起き失敗とは言はず 実信
失敗をアダムとイブのせいにする 良坊
失敗へ二号の方が元気づけ 古心佳
失敗はしませんがといふ金を貸し 方大人
失敗にふれず励ます母があり 葉光
失敗もせずに出世もしておらず 和友
失敗もあろうサーカス綱を張り 春日
失敗が二度目の切開から判かり 星浦
花を見る肥料が過ぎて枯れかかり 無松
失敗のあと判が要る判が要る 蘇堂
失敗へ二号は覚悟出来てゐる 失名
失敗をして世の中が判りかけ 水堂
娘の料理挿絵と違ふものが出来 英子
失敗をしてから振い立つ者さ 十悟
失敗へ重くく／＼つた大鳥居 一平
失敗を見る眼をそした苦勞人 与呂志
失敗の後を受けつぐ破目になり 夜潮
失敗を目覚めた頃に妻はなし 雄声
失敗と判つて酒の夜が続き 高志
カルメラを焼く失敗も子と楽し 京一樓
鐘一つ鳴つて拍手が鳴りやまず 芳仙
失敗をした同僚の椅子につき 十九平

失敗をして本当の友が出来 同
身におぼえある失敗をせめあふ 恵二朗
失敗を二号の方が先に知り ベン郎
失敗へ信用落ちず立ち上り 嘉一
失敗を見て見ぬ振りの生きぬ仲 凡平
失敗をみな東条のせいにする 山雨樓
佳・失敗を素直に詫言る子に育ち 悦子
佳・失敗で産んだ子供に養はれ 丁坊
佳・失敗の当座は妻へ素直なり 東岸子
佳・失敗をしてから父が好きになり 日本村
佳・反省をして失敗が生きて来る 美能留
佳・母のない子は失敗を放つとかれ 一瓢
佳・失敗は神を信じて起ち上り 万古
佳・失敗の後から惜しい智慧がつき 薺花

品質優良
タチカワペン先



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大阪市東区豊後町四八
立川商事株式會社

いのちある句を創れ



投稿規定
 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正
 随▼開催月日及場所記入▼締
 切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社川柳忌句会（大阪市）

九月十二日 午後六時

於 光明寺

句作の好シーズンと柳祖忌を迎え且つ
 路郎句集刊行に申込まんとする人々で受
 付は列をなす盛会であつた。開会に先立
 つて不朽洞会理事長中島生々庵氏より不
 朽洞会員中島鉄洲氏の計を報ぜられ出席
 者一同一分間黙禱を捧げた。続いて刊行
 会長としての中島生々庵氏は、待望久し
 き路郎師の句集愈々成ると喜びを以て発
 表し、実行委員を激励すると共に江湖の
 協力を希望せられた。路郎師の柳話は、
 川柳をもつて生活をよりよくすべき旨引
 例して述べられた。古方氏の句評は、八
 歩、小松園、豆秋、十三楼の諸氏の句を
 挙げて短評を加えられた。兼題席題披露
 後不朽洞賞優勝カップは永田都詩子氏が
 把握した。閉会九時（摩）

出席者 路郎・没食子・旅風・摩天郎・
 潮花・勝己・望峰・嘉一・悦子・紫郎・
 一夜・杏花・夢生・太路・淡舟・ひろし
 水堂・ゆずる・玲人・塗杖・静馬・凡九郎
 都詩子・京一様・一朗・乱酔・島浦・
 豚平・圭三・雅集・一十・勢波・好郎・
 六竜子・花村・少将・文蝶・生々庵・香林

多志志・春音・葉光・春集・牛歩・鮎美
 三司・鹿の子・賀峰・春柳・みのる・
 しげお・一三夫・茂子・淳子・与呂志・
 帆加夫・水素・十四郎・梅里・博也・
 水客・圭水・一瓢・貴山・麻由美・黒天
 子・紫香・黙平・いわを・花香・へとし
 小松園・梨里・霞乃

兼題「同僚」 麻生路郎選

困つたら来いと同僚からいわれ 勝己
 同僚のふところ当にして歩き 嘉一
 殉職は同僚の名を呼び続け 玲人
 同僚の出世子供を使こてくれ 季賢
 同僚の割勘五円玉も要り 一三夫
 同僚のよしみ杞憂とおもふ 香林
 同僚を踏みつけてまでせり上り 没食子
 同僚は昇給らしい飲みつぶり 六竜子
 同僚の義侠で一家立ち直り 春集
 同僚をさけて一人でめしにする いわを
 同僚に抜かれ抜かれて辞めず 好郎
 同僚でどちらも妻の眼を盗み 日本村
 ようと訪えばさる答える応接間 しげお
 同僚と写す写真は肩を組み 紫香
 同僚を亡くしさらさら秋の筆 鮎美
 同僚の女と云ふがバアーに居り 三司
 同僚のやけ酒までも付き合つて 寛峰
 同僚と呑んだ四馬路の灯が恋し 賀峯
 同僚が来てボーナスの嘘がばれ 杏花
 同僚の罪をかぶつて叱られる 京一様
 同僚は何んにも云わず待つて 香林
 橋筋で逢ふて同僚に又借られ 摩天郎
 同僚のこれからと言ふ死を悼み 少将
 同僚の無心へまろく 酔き ゆずる
 千円位いならと同僚借して呉れ 淡舟

同僚へ感謝特二の窓をあけ 紫郎
 同僚の内輪喧嘩が社にたまり 摩天郎
 左遷とは云わず同僚だけで呑み 三司
 同僚に一目おかすクリスチャン へとし
 母の苦の一つ同僚がみな酒豪 没食子
 同僚の頓智にピンチ切りぬける へとし
 長欠を見舞えば飲んで行け云々 三司
 灰皿も同僚と云う位置にあり 水客
 同僚に一ぱい喰つた電話口 春柳
 産制を同僚屋の話題に 都詩子
 金のことかと同僚うけつけず 路郎
 同僚だしかしあいつは金があり 同

兼題「父」

中島生々庵選

父の信仰お遍路さんを泊めて 香林
 鉤くず父のきげんに逆らわず 水客
 停年の父が水打つ尻からげ 三司
 三男が出来て父親らしくなり 一朗
 嫁ぐ日に亡母の形見を呉れた父 十四郎
 背のびして父は母よりまだ低い ひろ子
 禁煙の父の姿が淋し過ぎ ゆずる
 亡父の名を親音堂で見つけた 鮎美
 菊に立つ父を見つけてそれでよし 鹿の子
 父ちゃんが酔つたら安来節 与呂志
 父としてバチンコで取つた云々 十四郎
 父ちゃんの無口を母に子が 三司
 父の夢は僕はいつでも五、六歳 旅風
 肖像の父にすまない印を押し 花村
 父が呑むからとてみなに酌せられ 没食子
 墨すつて父に嬉しい日が続き 水客
 父はとも勉強すればすぐ級長 茂子
 真面目な父ダンスが出来て見直され ひろし
 還暦の父風雪に堪えた顔 玲人
 スキヤンダル矢張り父を信じ切 春柳

兼題「女秘書」

丸尾潮花選

亡き母のよき子に語る父の老い 葉光
 秋晴れへ父と並んで糸を垂れ 島浦
 晩酌を母へすゝめる父機嫌 圭三
 表札も父の形見と掛けて置き 花村
 古日記に見付けた父の子煩悩 杏花
 父のない子をひがませぬ母の意地 生々庵
 字の不味い事を気にして女秘書 文蝶
 女秘書笑つてばかりいない眉 葉光
 女秘書のつき合ひもして法善寺 古方
 本宅へ無事に送つて女秘書 紫郎
 女秘書ソロバンはじく事もあり 麻由美
 遠火事へ夜の姿の女秘書 水客
 女秘書兄を工場へ就職せやり 一夜
 大胆なボーイズが出来た女秘書 玲人
 女秘書妻のスパイと気がつかず 水茶
 女秘書或る日社長を正視せず 生々庵
 女秘書税のかゝらぬ手当も出 水堂
 女秘書に笑殺されたお茶をのみ 鮎美
 昇給が少し気になる女秘書 玲人
 あんなのが秘書云々のイヤリング 古方
 一人娘を秘書に仕立てて手放さ 一十
 女秘書社長の恋へ妬き始め 雅集
 女秘書夜汽車になつて無口なり 賀峯
 ニューモーター秘書殿が着て御座る 凡九郎
 旅馴れぬ虫を聞いている女秘書 水客
 奥さんが段々嫌な女秘書 春音
 汚職にも一役買つた女秘書 勝己
 女秘書今日は和服で辞めに来る 鮎美
 ハイヤーの速度を知つて女秘書 いわを
 労組を軽くさばいた女秘書 一三夫
 女秘書母に内緒の株もやり 春集
 風鈴の音へ落ちつく女秘書 潮花

席題「食慾」

川村好郎選

食慾へやせたいだけが娘の願い 三司
 食慾が出たと療養所のたより 圭三
 食慾の秋へ祭りの便り来る 一夜
 食慾をほめて帰った聴診器 悦子
 食慾の無いのに宴会多過ぎる 賀峯
 食慾は虫が喰つてたサントニン 島浦
 食慾が出た病室の窓硝子 いわを
 競輪にすつてんたんの食慾よ 鮎美
 食慾がなく病人は虫を聞き 春果
 食慾と別に娘の弁当箱 花村
 食慾と別に太つてくる苦痛 玲人
 食慾に誤算があつたハイキング 鹿の子
 食慾がつくとぼち／＼無理を云い 梅里
 芋蔓に食慾有つた頃唄ぶ 太路
 あの人が帰つた後を食べ直し 凡九郎
 食慾へこゝでバンドを締め直し 少将
 食慾と別に松茸買つて来る 十四郎
 食慾へ嬉しい意見聞くベツト 少将
 食慾のないおめでたの娘が戻り 悦子
 胸白がやつぱりよかつた箸 好郎

席題「大男」

岡田鹿の子選

網棚の棒を持つてゐる大男 紫香
 大男鴨居へ少し首を曲げ 圭三
 ハイヤーへ二つに折れて大男 嘉一
 押ピンの時は役立つ大男 夢生
 吊皮が袂に入る大男 帆加夫
 愛嬌もあり大男使われる 太路
 後ろから野次がとんでる大男 水堂
 大男だつた親父の服歩き 水茶
 G-1へ日本のパスが低くすぎる 一夜
 背の低い妻大男言い負かし 島浦
 大男びくりとさせた注射針 雅果

大男日本女性がものたらず 一瓢

大男やはり切ない恋があり 十四郎
 大男何かに損な勤め人 水茶
 大男棚の荷物を頼まれる 淡舟
 母の前さめざめ悔いる大男 悦子
 ビラをはる役に廻つた大男 紫香
 大男蚊帳の外から蚊に食われ 黙平
 大男二世かなと顔を見る 望峰
 大男用心棒の職があり 黙平
 大男も見合には氣乗せせず 多久志
 大男床屋の椅子に丸くなり 一三夫
 大男小さい嘘へ氣を使い 悦子
 大男或る日小さくかしこまり ゆずる
 あばら家へ尙大男目立つなり 杏花
 身に合うた浴衣も入れて大男 古方
 大男にテレビの粹がせま過ぎる 玲人
 大男一人混じつた立話 文蝶
 大男西陽のなかの失業苦 鮎美
 死んでまで誂えが要る大男 都詩子
 大男黙つていとと恐がられ 葉光
 人だから見下ろして居る大男 生々庵
 大男と聞けば住所の判る人 玲人
 大男やつと喜劇のエキストラ 好郎
 巨人と云ふあだ名で無口かゝ居 水客
 大男小さな夢を持ちつゞけ 十四郎
 大男虫歯一本もてあまし 勝己
 嶽の背(丈)に注文がある大男 鹿の子

席題「常連」

長谷川三司選

常連は予算あろうがなからうが 古方
 常連もマダムの恋に気が付かず 春果
 常連の一人無口なまゝで飲み 博也
 常連の一人々々にある仇名 玲人
 常連に聞いて貰つてマダム酔い 悦子

常連が用心棒と間違われ 潮花

常連に持てる気前の良いマダム 水茶
 常連の一人は酒の悪い性 いわを
 常連の名で新店の紺のれん 文蝶
 常連は黙つて坐れば酒が来る みのる
 常連へマダムの酒が一寸あり 博也
 常連は放つたかされてうれしがり 一三夫
 預りものという酒も出る御常連 香林
 たて込めば常連一人はつとかれ 梅里
 着流しのみ常連はふらりと来 一十
 常連が名士茶房がよくはやり 鹿の子
 常連の気安さ奥で掛けて呑み 没食子
 常連が段々ふえる店の味 春齊
 常連はマダムの癖を見逃さず 圭水
 常連に聞けば女将に男あり 淡舟
 常連になつてマダムを射止る氣 十四郎
 常連がホットニュースを聞いて来る 春果
 常連のいつも決つた椅子があり 京一樓
 ヤーヨーで常連のエチケツト 梅里
 常連はマダムの過去に触れず 三司

淀川支部句会(大阪市)

九月八日 於 香林居

武部香林報

逢引の二人を柳一寸なで 由行
 旧家とや化けて出さうな大柳 山茶花
 うだる午後風あるらしい柳ゆれ 都詩子
 こゝ風が吹いていますと柳ゆれ 勝己
 身を投げる位置に柳のある舞台 水堂
 言訳がたぬ主人のヨツブ酒 稔
 言訳をするには少し過ぎた酒 信雄
 言訳へ母相繼をうつつてやり 若菜
 言訳の先は向うで言ふてくれ 水茶
 言訳をして人生をきたなくし 香林

言訳が通つて酔がまわつて来 水堂

老人の日課としての植木鉢 勝己
 放送の声争えぬ皺がより 若菜
 おばあさんのこゝろきいた聞きにや 香林
 山女釣り川の瀬音は霧の中 花村
 川岸の大坂の恋見て歩き 六竜子
 荒川で産湯つかつた痰阿切り 水堂
 川曲るとほりに曲る国境ひ 花村

梅田支部句会(大阪市)

九月十四日 於 阪神ビル三階

水谷鮎美報

ホームラン打たして欲し秋の空 帆加夫
 秋しづか二人の恋も亦しずか 凡九郎
 名人もやつぱり淋しい秋の暮れ 杜的
 逝く秋へフキルム二本で足るるか 六竜子
 月賦だけ残つて秋となりけり しげお
 寝ころべば畳が秋を伝へて来 一夜
 相棒へ氣になる電話がかかつて来 十四郎
 相棒も欠勤してた二日酔ひ 杏花
 えび天へネオンがすれ越して消え 万的
 手伝はす方が疲れる馬鹿力 正斗
 ちつぽけな入墨してる馬鹿力 紫香
 一疋の蠅に夫の眉動く 正司

阪田膳写版

二五町田芝区北市阪大

会商田阪会株式

番一九九五 島福 話電
 番四一三 六五

西陽さす疊に蠅が二つ三つ へとち
どん底の一ぜん飯の蠅追はず 鮎美
住み付いたように茶の間を蠅去らず 杏花
蠅叩き持てば少しも飛んで来ず 悦朗
日帰りに京は名所が多すぎる 正司
日帰りの忙しさ名物買ひ損ね 杏花
日帰りで行ける実家が物足らず 水客
日帰りの旅にもあつた温泉の香り 三司
日帰りをして駅からの雨に濡れ 白溪子
日帰りへ娘バニーマをあてゝ来る 圭三
日帰りの姑うれしく蛸をさげ 鮎美
日帰りでよかつた夜の雨を聞き 帆加夫

川 日立櫻島支部句会(大阪市)

八月五日 於 日立造船所

丸尾潮花報

妻の眼に花火淋しいものに見え 潮花
くらがりの二人へバット散る花火 浮雲
着くすれの浴衣のまゝで見る花火 定美
川岸の妻を花火がふり向かせ 秋花
でしやばりの子で人前へ出ながら 牧湖
でしやばりへいやな掛合もつて行き 望峰
買つて出たもめ事ちつて手にあまり 吞水
内心は聞かずでしやばり茶々を入れ 巨船
出しやばりにまかせ町内会平和 一瓢
一流ののれんであつてよくはやり 有泉
生一本これが自慢の縄のれん 浮雲
出しやばつたばかりにいやな役を買ひ 平三郎
日傭へ涼しくゆれる縄のれん 潮花

川 備前支部句会(岡山県)

八月二十三日 大森娘句案居

浜田久米雄報

大根がこんなにうまい旅がえり 正洲

川 下関支部句会(下関市)

九月十三日 於 半休門居

石川侃流洞報

共稼ぎ兼用傘の迎えが来 侃流洞
熱兆す母なり黒き蛾におびえ 同
賞品に農機具も有り宮角力 妻揚子
一つだけ瞬いて居り誘蛾灯 同
朝顔に出勤の希望満ち満ちて かうたる
共稼ぎ母には少しきつい 嫁 半休門
共稼ぎもう長くない腹となり 成理智
五指のない恩賜の腕の冷たそう 土筆坊
軍配へあがる喊声未だやまず 米三
秋場所ほ若荷の花にちと遅れ 銀町
娘二三夜なべの針をいらだたし はなみ
共稼ぎ妻の帰りを待つ夕餉 みつる
勤続が惜しく女房まだつとめ 蘇人
掛布団一枚入れた蚊帳の中 司楼
誘蛾灯旅の情緒に加えられ 鬼道
苦虫の理由を秘書は知つて 柳慶
人工雨降らせぬ方も願いたし 周平
千両がなんなく動く相場の手 藤市
町内の名譽を賭けた五人抜き 木揚子
家の建つ貯金まだく共稼ぎ 十字星
草角力あの娘の手前負けられぬ 良坊

敵将も砂薙けてある取り直し 九呂平
共稼ぎしても結婚したい仲 柳蛙
川柳雑誌社 ウイロー社句会
ハワイ支部 (布哇)

五月十日 於 ホロホロイン

築山快夢起報

蠅ですら脚で背拭く芸があり 紀南児
学芸会頭をかげば幕を入れ 拝山
姉芸者一つ唄つて煙草にし 暁舟
道楽に習つた芸で食つて居る 泉水
芸事も習ひつくして縁遠い 草一郎
隠し芸ハトボツボでにござとき 峯雪
飲む程に裸になるがババの芸 彦坊
何をしに生れたか芸一つなく 施風
芸術に生きんが為の苦勞する 晶子
恐ろしや芸は乙女も長者にし 芳雨
機先で隠してる芸をけしかける 自然生
芸道に生きるつもりを酒も酌ぎ 晚翠
芸道に生きる覚悟の恋もすて 魔花麗
芸人になつた積りの口を利き 迷朗
芸なしの手に箸だけはよく動き 柳葉
芸術と理性が娘の不倖 笑有
芸だけで立てぬ生計が身をくづ 細民
芸術賞輝く胸は病んで居り 快夢起

川 弓削支部句会(岡山県)

九月五日 於 金光教会所

福島鉄児報

貧乏を浮世のせいにし落し 巷雨
節穴へ要行水が落ち着けず 伊佐武
まだ起きて居る灯節穴から洩れる 鉄児
節穴の方え屏風を立て直し 白頭
どの家も柱時計は明治型 鳴子

川 大聖寺支部句会(石川県)

九月十一日 於 卓風居

野村味平報

振り上げた手をポケットに教師去る 敏夫
平手打ちインテリ女性唇をかみ 魯木

小児科
内科
性病科

安岡醫院

安岡三四郎

道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南②三二四六

腹時計屋はとくくに過ぎて居る 桃々
時計見て消す氣になつた夜業の灯 久米女
風寝から覚めて時計の針を巻き 野人
目さましを枕に置いたまゝ寝過ぎ 笑泉
外出の化粧時計を側へ置き 大戸
米になる時計へ妻も泣いて呉れ 不老
全快へもう呑み連れの尋ねて来 鉄児
ライバルの全快一寸喜べず 七面山
全快の子が教室の隅に座し 奇童
全快の祝の席でまた倒れ 巷雨
全快へ散葉二服程余り 牛歩
全快へいま一息の金を借り 水甫
火吹竹置いて都の話聞き 七面山
火吹竹頬ふくらまし 鉄児
火吹竹涙を拭いて吹き直し 不老
珍らしく早く帰つて疑はれ 一貫
珍らしい親切少し氣にかかり 風樹
珍客の最後は金のこと触れ 牛歩

湯郷温泉納涼川柳大会
 八月十六日 於 湯郷高校講堂
 大森風来子報
 あの頃の夢は海軍司令官 豊年
 私の夢は共稼ぎではなかつたに 弦児
 上野署が夢と現実今日も説き 十九平
 見る夢もやつはりチャチャ夢であり 案山子
 五十代色あせた夢持つており 蛙波
 スターへの夢がこうじた保護願 石童
 娘の夢をこわさぬ為の氣も遣い 牛耕
 もう無邪氣では物足りぬアランセ ゆたか
 下心知らず無邪氣でついてくる 宇柳
 無邪氣らしく見せる女の哀なる 幹二
 無邪氣さの内にはのかな恋があり 雨水
 もう切れるつもり旦那は叱らない 菅公
 切れそうな堤へ予算を組みかま 一也
 こま切れの肉蕚い合う子沢山 美福通
 切れるのをこつそり弟子は使う見 幻柳
 切れる氣にさせたま見馴れぬ男下駄 滴水
 本妻が出れば電話は切れており 方大
 御隠居の自慢は蛸が噛み切れる 麦太楼
 切れ味を試すと鯉のいきづくや 千容
 恐妻に派手に敷かれるポーナス日 だだみ
 アルバムへこんなに派手であつた母 登仙
 退院の日へ派手なのを別に縫い かよ女
 温泉へアドルムを持つ逃避行 北嶺
 全快す一心一日中を湯につかり 雨水

温泉へ遊んで居れる 診断書 藤波
お土産の靴が座敷を かけ廻り 花蜂
肩書の上産を母は ふれ歩き 幻柳
看板の裏でやりくり やつてます 米花
特価品だけ 看板を別に 出し 鳴子
パトロンが 変り看板 塗り直し 蛙波
恩人を露路に見 つけた虫が 鳴き 白柳子
虫供養笑面に 趣味の人が 寄り 真希恵

澁川海水浴場納涼川柳大会

八月九日 於 澁川海研

背泳へこうまで 青い空があり あきら
島の子は夕陽に 染りつゝ 泳ぎ 木太八
泳げない母も 水着を着て 守り はじめ
浜の砂信じ合う 歩が静かなり 秀魁
砂の跡ここでは 靴が向い合い 方大
砂浴びる 鶏に 老後を 養われ 美婦遍
野次一つ 飛ばず 歳費が 値上げされ 笑 児
ボートでは キツスは 出来ぬものぞ 知り 風来子
サンダル の紐の間も 蚊に 喰われ 牛耕
サンダルを 穿けは ドレスを 名が 変り 惠二朗
サンダルで 来た娘へ 雑巾しは られる 禅一
スカートを 一寸 おきえた エチケツト 美能留
請求書女給が 喰つた 分ものり 格一
基地 悲し 爆音包む 雲の 峯 風来子

日の丸句会（鳥取市）

八月二十七日 卜 天居

河村日満報

門番を 十万円の 犬に させ 日満
食いつめた 故郷へ 結局 舞ひ 戻り 三歩
故郷には 帰れぬ 前の 借があり 秀和
名産の 味で ふるさと は められる たかし
町になり 市になり 故郷らしく なし 日満
見覚への 看板 故郷は 近くなり 芳道

パチンコに半分つき込め夏期手当三歩
夏期手当入れて家計簿黒でぐめ芳道
「頂きます」仏の返事ないけれど日満
婦にきて仏の数を自慢されト天

南海電鐵川柳会（大阪市）
七月廿日 於 粉浜親和寮 友淵貴山報

床下の浸水位とはつとかれ 貴山
殺生な闇屋ひしめく水害地 圭水
雑巾に疲れし母の一生よ 摩太郎
勿体なや又雑布が酒をのみ 雄声
面白顔で希望の三枚目 貴山
仲人は母の希望も少し入れ 摩太郎
アブレなど云はれ聖書も読んで居り 圭水
パイブルを離さず恋のなやみあり 貴山
聖書から子も誕生の道に生き 摩太郎
み恵みを受けた感じの聖書閉づ のぼる
修道尼聖書読む眼の美しさ 主水
パイブルも読み飽きたりさ斗病記 雄声
パイブルはアクセサリーで耐え飲め 路郎

みつくりし川柳会（大阪府）
八月十一日 於 天王寺中学校 戸田古方報

盆踊り故郷は出雲と云ふ女中 賀峰

東京そばど 灘一とすじ
アベノ橋地下映画食堂街

梅里の店 大萬

★大万川柳（第卅二回）を募る
兼題 「相惚れ」 路郎先生選
締切・十一月十五日（句底五句以内）
発表・十一月廿一日（産内掲載）
御投稿は大万宛となたでも

盆踊りマイク故障で汗をふき 正斗
盆踊り屋の櫓に陽がまとも 古方
失敗へ微笑ですます腹が出来 賀峰
中年増その微笑の気味悪し 凡九郎
間ひつめる客へ微笑の酒を酌ぎ 同
十手には揉手などして世辭を云い 雄声
判官も十手の頃を懐しみ 同
見取図の十手の先へ注いだ眼のぼる 同
十手いま固に何か言ひ含め 同
十手持ちながらエキストラ切られ役 正斗
天気図も注意して見る式近し 圭水
誰われているとは知らぬ古狸のぼる 凡九郎
人間にだまされ檻へ狸住み 凡九郎

米子金曜会 (米子市)

八月五日 於 米子漁業組合事務所
八月二十八日 小西雄々報

人妻になつて本當の事が言え 水鏡
髪結の辭義を吞込む長煙管 黙庵
生きている証拠に小屋の煙立ち 鉄平
虫のジャズ止んでアジトの不安感 久城
敗戦の思出蓋の無い飯盒 健吉
相乗りのボート火花の渦をさけ 香央
寺の世話する年頃を詫しがり さんじ
南禅寺案内役の尼若し 松子
寺の名をみんなおぼえて祖母達者 錦鬼
夕焼にサイレン余音まだ続く 俊郎

竹柳会 (群馬県)

荻原竹郎報

半鐘がサイレンとなり市制布き 至極
鳴き出した虫に風鈴涼しすぎ 雄々
許されぬ二人は清き断末魔 笑笑
呆気なく花火終つて蚊張を吊り 一笑
ビールなら加入します手は上り 星雨
肌見せるだけの水着と知る浜辺 虹児

夕立の晴れて涼しい膳となり 安兵衛
お互の故郷は遠く天の川 幸太郎
長雨のあくび雨腕つき上げる 竹要
踏切で列車が長い急な用 西坊
長びいた返事写真を返される 同
沼津です快連車です出合です 早男

石根川柳会 (愛媛県)

九月十二日

於 石根小学校
高木文化報

カステラが溜り全快ほど近い 十朗
快晴の海へくつきり佐渡が浮き 孤雁
赤飯も未だやわらかな内祝 竹郎
快方に向ひ食べたいものが増え 柳架

係長家が太つて調べられ 巧
この通りですと課長え診断書 南天
船長が油もさしてボツボ船 重郎
一つ門くぐつて暮す二タ世帯 松雄
基仇がこれから入る仁王門 青柳子
一隅は蚊張がはずしてある朝寝 文化
下駄もいる靴も要る娘を嫁にやり 守

柳・界・展・望

▼本社十一月旬会は七日午後六時から下寺町二丁目市バス停前光明寺で開催▼川維阿倍野支部では十月廿四日午後六時から西光寺で大西野介追悼句会を開催▼大阪通信病院川柳会は十月廿四日午後二時から三階図書室で例会開催▼大阪南区医師会文化部杏林川柳会は十月廿七日午後七時半から瑞川居で例会開催▼南海電鉄川柳会は十月廿六日午後五時半から粉浜の親和寮で開催▼市電文化祭参加川柳大会は十月廿八日午後四時から境川の大交會館で開催▼関西配電川柳会 (大阪) は十月五

日午後五時半から梅枝枝町の本社地下食堂で開催、以上何れも路都主幹出席▼川維淀川支部句会 (大阪市) は十月八日午後六時武部香林居で開催▼川維岡山九月例会は十三日に山陽旅館で開催された▼川維備前支部 (岡山県) は九月例会を十三日に久米雄居で開催した▼川維下関支部では同八三田周平氏 (元下関駅長松村晴氏) が下関市助役に就任されたので祝賀句会を九月十九日に開催▼青蛙川柳会 (伊丹市) は十月十二日午後五時から健康会館階上で長月例会を開催▼川維穂井田グループ川柳会 (岡山県) は九月八日に例会開催▼高田市制五周年、高田川柳会三周年記念川柳大会が高田川柳会主催、中和新報社後援で十月四日正午から大和高田市社会館で開催

された▼三井造船秋期川柳会 (玉野市) は九月三十日午後四時半から三友クラブ広間で開催▼鳳柳会十月旬会 (岡山県) は四日にゆたか居で開催▼文化祭協賛堺市民川柳大会が十一月一日 (日) 午後一時から府立堺労働会館で堺川柳人グループ主催、堺市教育委員会後援で開催される▼広島川柳会第二例会は九月廿五日午後六時から広島貿易館で開催された▼水島公民館川柳の会 (倉敷) は九月十九日夜開催された▼第一連合俱樂部鉄道川柳大会 (呉市) が十月九日午後一時から呉駅休養室で開催▼大和高田市制五周年、高田川柳会三周年記念川柳大会が十月四日正午から高田市社会館で開催され我社から方正、水客、古方、鮎美の四氏が出席した▼石居高志氏は大阪

市天王寺区上本町九ノ二八永楽輪業株式会社大阪出張所へ転勤された▼原章坊氏は転職のため下記へ移られた出雲市今市町日吉町▼西川青美氏の事務所西川貿易株式会社が大阪市東区南久太郎町四ノ一中央繊維ビル三階へ移られた▼上野錦水氏 (小松市) は九月廿三日に金沢の祝賀川柳大会へ出席された安川久留美氏と路郎師の事など一タ語り合はれた由▼本田柳一路氏 (小松市) 元川維小松支部の幹事をされていた同氏は咽喉癌で金沢国立病院へ入院、重態の由▼小林白鳳氏 (津山市) は週刊新津山に「奥の細道を行く」を連載されている▼西島〇九氏 (東京都) は九月上旬鎌谷小波を偲ぶ会でお話されNHKの録音放送でその声が伝えられた▼重田嶺南氏 (小浜

瓶の銀山

大阪市大淀區長柄
四邊一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話掛川四七七番

市) は台風十三号の被害は軽微であつたが同級生であり懇意であつた中崎市長一家全滅の悲惨事に遭遇、五名の内孫一名の死体が日本海に出て南西郷村日向の海岸に漂着他はまだ死体発見されずとのこと。同情に堪えない。



編輯局にて

★台風十三号襲来で、あちこちで随分被害があつたらしいが、お見舞の方法もつかないの、ただ手をつかねてお案じ申上げていたに過ぎない。御容赦を乞う★前号から増ページして、内容の充実に腐心したが、仕甲斐があつて非常に好評であつた★本誌の執筆陣は既に定評があるが、一層の新鮮味を盛るために、新人の輩出を

不朽洞

会から

▼藤本満年氏（東京都）は山陽新聞東京支社長の現職のまま、十月一日から発足する岡山・山陽放送の東京支社長を兼務多忙の日々を送つていらる▼布施筑川博士（国立大阪病院副院長）が白内障術のため九月廿日に阪大附属病院新館五階へ入院された▼徳永雅美氏（大阪市）方に電話が開通した東（94）七五二三番▼浜田久米雄氏（岡山県）は十月一日公用で来阪され、北川泰葉氏と談話即日帰岡された▼姫田夕鐘氏は高知県幡多郡宿毛町本町西日本坑木株式会社高知駐勤所へ移られた▼河村日清

大いに期待している★本誌の特色である座談は本号では霞乃、鮎美古方の三人で、好きな句について話してもらつた、前号とは全く趣きの変わったものである★趣きが変ると云えば東野大八氏の「人間横丁」も本号では話題がありし日の北京の川柳会の模様である。昭和十三年の夏だつたか、私の北支蒙疆の旅の途次天津で熱然人に会い、故郷と私が北京へ出る時、同行して北京で家を探がして開業したので浪速ホテルである。★私は九月は西日本川柳大会へ招かれて岡山県へ行つたが十月には上京する積りだ。しかし日程がないので例の東京の空気を吸うたらずぐ帰るつもりだ。（路）

氏（鳥取市）は九月二十九日に米子市の三嶋美笑氏を訪問柳談を交わされた▼三嶋美笑氏の川柳展が十一月三日の文化の日から一週間米子市の鐵田呉服店と米子市公民館で開かれる由、主催は山陰日日新聞社、盛會をお祈りする▼上田翠光氏（奈良県）からの通信では室生口大野からバスがついたたのであの長い道を歩かなくてもよいやうである。向淵（むこう）の学校前まで乗れるとのこと▼前田伍健氏（松山市）は南海放送局（A.F）が出来、NHKと共に応援協力をお願いされ両局かけもちで多忙だそうだ▼弘津柳慶氏（下関市）は九月廿五日から十日間公用で佐世保市、福岡市へ出張された由▼

本田恵二朗氏（岡山県）のおたよりによると九月廿六日に美作町に榮柳会が発足、林野駅前の松島別館で開催、瀧川会、我柳会、諷柳会が多数参加盛會だつた由、なお同氏は十月十一日の川維岡山句会へ出席、十三、十四日は岡山市公会堂での県下選挙管理委員長会に出席されると▼麻生路郎氏は十月一日から山陽新聞朝刊の時事川柳の選を担当されることになつた▼福島鉄児氏（岡山県）は西日本川柳大会が百四十余名出席の盛會ぶりに町の川柳に対する認識を一層深めたので骨折甲斐がありホツトしているとのこと▼中村たけみ氏は玉野市浪川へ新築移転された▼野村味平氏（石川県）のおたよりによると大聖寺支部員一同床下浸水をされたとのこと、謹んでお見舞申上げる▼富士野鞍馬氏（東京都）は指が少しくなられたので「平清盛」を執筆、次ぎは「平重盛」を執筆、吉川英治氏と並行して平家物語を川柳と人名とでゆくとのこと▼藤本満年氏（東京都）は全国新聞大会の延長として全国の新聞社経営代表者一行の日光、鬼怒川旅行に参加され十月四日鬼怒川ホテルから旅信を寄せられた▼小西無鬼氏（兵庫県）は令息が本年同志社大学を卒業されるので目下就職運動に奔走されている由▼麻生路郎氏は毎日新聞の依頼によつて新日本放送のモーニングタイムズの「今日の川柳」を担当されている。

新会員紹介

十月

岡本薫（岡山県）正

風来子氏推薦

十一月

津田麦太楼（岡山市）正

風来子氏推薦

小西雄々（米子市）正

美笑氏推薦

柳人交歓新春廣告を募る

是非一ト口は！

★一ト口金百円。

幾口でも申込ま

れた一と口分の

原稿は住所と

姓と雅号程度。

活字指定はおま

かせ乞ふ一と口

分は五分の一段

組三行。

★原稿締切は十一

月二十日限

★広告料は前金の

こと

川柳雑誌社

川柳雑誌社特製
投句用 柳箋

一冊（五〇枚綴）三〇円

送料 八円

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

履歷書（廿句）武部 香林選
風邪（廿句）丸尾 潮花選
妻（廿句）福田山雨楼選
旅（廿句）長野 井蛙選
（十二月二十日締切）

毎號募集

近作柳樹（雜詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雜 詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）
（毎月廿日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樹』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は何人でも投句が出る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第八卷 第十一号

（載轉禁）

半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円
昭和廿八年十月廿五日印刷
昭和廿八年十一月一日発行

大坂市青島町内方町五十二番地
行印刷所 麻生幸一郎
大坂市青島町内方町五十二番地

発行所 川柳雑誌社

（昭和廿八年十月廿五日）

THE SENRYU ZASSHI

NO. 318

Published monthly by Senryu Zasshi-sha, Osaka, Japan.

自轉車は

シマノの

3.3.3号



避妊には..

ゼリー剤を!



★溶ける時間がい
らず速効且つ確実
で運用しても無害
★注入器で深部へ
送るが、タンポン
に塗り御使用をノ

サンシーゼリー



1瓶 2 太郎 3 サンシー

秋たかし...

大川峠・加太コー ス
奥新和歌浦コー ス
友ヶ島一周コー ス
岩湧山コー ス
金剛山コー ス

・ハイキングチケット発売中
・ハイキング列車特発 (日曜・祭日ごと)
南海本線 なんば発 8時50分
高野線 9時33分
・ハイキングスナップ写真コンクール作品募集

南海電車